セレブな執事と庶民な主

Miel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セレブな執事と庶民な主

【Ｎコード】
Ｎ８０６８Ｊ

【作者名】
Ｍｉｅｌ

【あらすじ】
平凡な庶民みはるに、なぜか専属執事がついてきた。しかも外国人。どーするよ？
庶民な生活に、執事は必要ないのに・・・（困）

贈り物は執事さん（前書き）

登場する国は架空のものです。
とにかく明るく軽いシンデレラストーリーが書きたくて書きました。
苦手な方は回れ右で！

贈り物は執事さん

初めての海外旅行！

そして初めてのパリだ！！

1年も前から準備していた。お給料が安い私は少しずつお金を貯めて準備していた。

ピアノ留学した友人が、そのままパリに暮らす事になったので仲の良かった
香澄と都子と一緒に遊びに行こうという事になったのだ。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――

パリは街中どこもかしこも絵になる街で、あたし達は浮き足立っていた。
パンもチーズも美味しいし、ケーキなんて宝石のようなケーキがずらりと
並んでいた。
滞在3日目、友人がお世話になっているマダムに会える約束だったが、
その日の朝、マダムが熱を出し、流行りのインフルエンザの疑いが濃厚で
結局会えなくなり、あたし達は老舗のデパートに向かった。
目的は、ブランドバッグ！！！

香澄と都子は、旅行の一番の楽しみがこれだったと言っても過言ではない。
建物に入るなり、それぞれ目的のお店に散った。

あたしは・・・正直あまり興味がない。

観光疲れもあって、ベンチが並んだスペースを見つけ、座り込んだ。
今は海外でも携帯が使えるから便利だ。後から2人と連絡を取ったらいいだろう・・。

座って休んでいると、お上品な感じの老夫婦が現れ、おばあさんがあたしの
隣に腰掛けた。
おじいさんは・・空席が無く、立ったままだ。
もう充分休んだし・・と思って、席を譲ろうと立ち上がろうとした。

ええっと、ここはフランスだ。何て言えばいいんだろ?
とりあえず「プリーズ」でも通じるかな?なんて考えていると、隣のおばあさんに
「ｎｏｎ!」と腕を押さえられた。
どうやら、立たなくていい。という事らしい。
そのまま腕をつかまれ、笑顔で話しかけてくるマダム。

えぇっと・・・何言ってるんだろ?

きっと、ちょっと困ったのが顔に出てしまったんだろう。

「ニホンジン?」

と、カタコトだが日本語で話しかけてくれた。

「あ、ハイ。」

空席ができ、おじいさんも座って会話が進む。

「パリは初めて？」「どうして来たの？」「ひとりなの？」

なんだか質問攻めにあってしまった。

一生懸命、なるべく簡単な日本語を使って話していると、電話が鳴った。

都子だ。きっと、買い物が済んだんだろう。

自分はもう行かなければならない。と告げ、立ち上がった。

ふと、バッグの中に入っている物を思い出した。

そうだ・・・マダムに会えたらと思って、日本からお土産を買っていた・・。

「プレゼントです」

隣に居たおばあさんに渡そう。そう思いついて、棒状の物を渡す。

おばあさんは少し驚いたようだった。

日本の、扇子だと説明し、使ってみせるととても喜んだ。

無駄になるはずだったものが、喜ばれて良かった。そう思いながら

老夫婦とは別れ、
都子達のもとへ向かった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

帰国して３ヶ月も経ったある日。

我が家に似つかわしくない人がやってきた。
テレビでよく見る、国際弁護士とかいう人だ。
根がミーハーな両親は、かなり浮き足立っている。後でサインもらおうか・・
なんて話してるけど、いやいや、その前に何しに来たのか聞こうよ！
すると、とある外国の富豪の依頼で、あたしを探していたんだと言う。
ママは「みはる、出生の秘密！実は富豪の娘だったとか？」なんて言い出す。
けど・・・アンタがあたしを産んだって自分でわかってるでしょーが！

そんな漫才のような家族のやり取りに、テレビではタレントのようにノリの良い

国際弁護士は、へらっと営業用スマイルを見せただけだった。

「このご夫婦・・ご存知ですか?」

出された写真を見ると・・・

「あ」

そう、パリのデパートで出会った老夫婦だった。

「旅行で行ったパリで・・会いました」

「ええ。この方々が、あなたを探していました」

「へ?でも・・どうして?」

「実は・・こちらのご婦人が亡くなられましてね。あなたに遺産を残されました。」

「「「えっ!?」」」

パパとママと見事にハモった。

弁護士は難しい顔をして、分厚い書類を出す。

「遺言書によると、日野みはるさんに遺された遺産は以下の物です。
婦人が所有していたマンション。所有していた航空会社の生涯無料搭乗権利。
・・・これは後ほどみはるさん名義のＩＤカードを作成します。
このカードがあれば、その航空会社の飛行機はどこでも無料で乗れますよ。
そしてあともう１つ。専属執事が１名。」

は？

しつじ？

それってアレですか？よくテレビや本で見るような「お帰りなさいませお嬢様」とか
やる人の事ですか？

と言うと、返ってきたのは苦笑いだ。

すいませんねー。だってさ、弁護士さんの言う事は全部、庶民の域を超えすぎちゃってて、
想像も出来ないよ。

「で・・・」

口を開いたのは、一番最初に正気に戻ったパパだ。

あたしとママは、まだ口をあんぐる開けてる。

「マンションだとか言われてもですね、それは一体どこの話で・・」

「そりゃ、パリで会ったおばあちゃんだもの。パリなんじゃない？
そんなの、
もらっても困るっていうか・・」

そうだよ。いくら遺産相続って言っても、あたしは日本に居るんだもの。
無料搭乗権利だとか、マンションだとか・・執事だとか、全部パリなら
相続は無いも同然だ。

あまりの話の規模の大きさに圧倒されてパニック起こしそうだったけど、
どうやら今までと変わらず過ごせるらしい。
あーびっくりした。ちょっとホッとした。

すると

「いえ。パリではございません。」

「へ？」

「ジュエル王国です」

はい？それってドコデスカ？

贈り物は執事さん（後書き）

実は訳半分は実話。

ジュエル王国。

なにそれ？　言葉の響きから、なんとなくキティとかミッキーみたいなそんなキャラクターが頭に浮かんでも仕方ないと思う。

「どっかのテーマパークとか？」

目の前のタレント弁護士は呆れたような表情になった。

む。何よ。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――

そしてあたしは今、機上の人だったりする。

今度はひとりきりだ。いや、ひとりきりではない。横にはあの弁護士が座ってる。

それもファーストクラスってやつだ！！

あたしが会ったあの老夫婦は、そのジュエル王国とかいうヨーロッパの小国の先々代の国王ご夫妻だったんだそうだ。

道理でお上品に見えたわけだ。なんて妙に納得してしまったんだけど、だからといって

なんとなく扇子を渡しただけで遺産相続って、そんなのは納得できない！
しかも、その遺産の中には「執事さん」ももれなくついてくるのだ。
イキモノだよ！しかも外国人だよ！困るっつーの！

長い長いフライトの間、弁護士さんは無知なあたしにジュエル王国の話しをしてくれた。
他に話す事ないものね。

ジュエル王国とは、ヨーロッパの大国と大国の間にちんまりと存在する小国らしい。
周りを高く硬い岩山で囲まれ、更にその岩山の頂上付近は常に霧が濃く、それが
城壁のような役割を担い、戦争に巻き込まれなかったのだそうだ。
硬い岩山は、現代の技術をもってしても陸路を造る事が出来ず、隣国であっても
基本空路のみ。という、ある意味半鎖国のような国で、良くも悪くも他国の影響を
受けず、ひっそりと長く続いてきた国なのだという。
なんか神秘的！！
高い岩山と濃い霧の影響か、日本のように四季がはっきりした気候で、自然豊か。
特に水がきれいで美容に良いらしく、温泉も湧いていて、ジュエル王国の国民はというと
そんな豊かな自然とキレイな水のおかげか、全員、と言っても過言ではない位
美形揃いなのだそうだ。
宝石のような美しい人種の住む、美しい国。それがジュエル王国な

のだ。
最近では、欧米のセレブの間でジュエル王国のリゾートエステが人気で、自然と
美容と美食（水が良けりゃ食べ物も美味しいってね～）で裕福な国になったのだと
言う。

あぁ、そういえばかなりのお年に見えたけれど、確かにおじーちゃんもおばーちゃんも
気品があって凛とした雰囲気で若い頃はさぞかし美しかったのだろう・・って
面影がありまくりだったわ。

けど、なぜあたしに遺産を・・と思うほど、あたしが印象に残ったのだろう？

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「霧が濃くなってきた。もうすぐ着きますよ」

言われて窓から外を見たら、本当だ。何にも見えない！！真っ白だ！
この霧を抜けたら・・その神秘の国があるのか・・・。

白い濃い霧が段々薄くなり、視界が開けた！と思ったら、目の前には
中世のお城や大聖堂のような大きな威厳のある建物や、その周りにはエンジ色に
統一された屋根の可愛いお家が並んでいた。

至るところにそのような集落があり、その周りは濃い緑の芝、そして森だった。
現代的な道路や車も小さく見えるけれど、馬や馬車が走っているのが当然とも
思えるような、そんな景色だった。

飛行機を降りたら、マントを羽織った従者みたいな人が来て馬車に乗せられるんじゃないの??
なんてちょっと乙女チックな事を考えていたけど、迎えに来たのはスーツをきちんと
着たお兄さんで、
車も日本の狭い道じゃ走れないね〜って位車体の長い、所謂リムジンってやつだった。
真っ白なリムジンが現れた時もびっくりだったけど、車から降りたお兄さんを見たら
リムジンの驚きなんか吹っ飛んだ。
だって、運転手してるのが不思議なくらいのイケメンだったんだもの!!

そういえば、空港でもちらほら美形の人は居た。
けど、まぁ至って普通の容姿の人もいたので、気にならなかったし、
さっき弁護士さんから
聞いた「国民全員が奇跡の美形」っていうのは大げさな賛辞だな。
って思ってた。
けど、空港に居た人全員がこの国の人では無いのも当たり前よね。
それ位、この国の街の奥に入れば入るほど、目に入る人は美形ばかりだった。
なんだこの国!そりゃ、欧米セレブもあやかりたくなるわ!!
呆気に取られていると、イケメン運転手と共にやってきたスーパー

モデル並みの
女性にクスクス笑われた。
女性はクリスティンと言って、滞在中にあたしのお世話をしてくれるらしい。
ありがたやありがたや～。
だって今回は友人もいなくて1人。言葉もわからない初めての国で・・・
・・・・・・
・・・・・・

ん?

言葉、通じてるんですけど?
つか、運転手さんもクリスティンさんも日本語話してるんですけど??

そういえば、亡くなったおばーちゃんもちょっとつたなかったけど話してた・・。

質問すると、なんと、突然どこからともなく現れ、この国に住み着いた日本人家族の
伝説があるのだという。
もう１００年位前、と言っていたから、どうやってこの国にたどり着いたかはナゾ。
最初は肌の色も髪も、目の色も、言葉も違う家族を避けていた住民も、真面目に
よく働く日本人家族に段々心を許した。

その噂を聞きつけ、その時代の王子が馬に乗って日本人家族に会いに来たのだという。
その時、王子が日本人の娘にヒトメボレ。
その想いを貫き、めでたく結婚。
一途に娘を想った王子は、自分が王になったら一夫多妻系を廃止。
同時に、第二言語を
日本語に指定。熱心に日本語を広めたのだという。

そんな伝説もあって、異国で会って扇子をくれたあたしの事が、心に残ったらしい。

へー、こんな遠くにある、小さなキレイな国で日本語が使われているなんて・・。

「更に伝説があります。日本人と結婚してからというもの、王族の皆さんは
更に美しくなったそうですわ」

「はぁ・・でもクリスティンさんもとーっても美しいですよ?」

「ありがとうございます。でも王族の皆様に較べたら全然・・国王の一族は、
お名前の一部に宝石の名前を持つほど、美しいんですよ」

「はぁ〜。それは凄いですねぇ」

想像もつかないや。クリスティンさんより全然美しいって、レベルがもうわかんないよ。
一生懸命想像しようとしてる内に、リムジンが大きな大きな門を通った。キリンも

通れるんじゃないか？って位の巨大さだ！

遠くに、日本だったら絶対「ドーム〇個分」って表現されるぞって位、桁違いの
大きさのお城が見えた。
これ、人の住居ですか？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

通された部屋は、靴を履いているのが申し訳なくなるくらい、ふわふわの
つやつやの柔らかい絨毯が敷き詰められた、高～い天井がシャンデリアで
まぶしい部屋だった。

座って待つように言われ、これまたやけにふかふかの座り心地の良いソファに
身を沈める。

・・・・落ち着かない！！！

飛行機、疲れるだろうなーと思って、エコノミー体質なあたしは少しゆるめの
ジーンズを履いていた。
今、ものすごく後悔している。この場にそぐわなさすぎる・・・。
思わず隣のソファに座る弁護士さんを恨めしげに見てしまう。
こんなお城だって知ってたなら言ってよ！

こんなイチキュッパのジーンズなんて履いてこなかったよ！
せめて・・・そう、せめてナナキュッパのワンピ？あー。むなしい。

少しすると、控えめなノックが響き、一人の長身の男の人が入ってきた。

運転手さんで少しは美形に免疫がついたと思ったあたしを衝撃が襲った。

な、なんですかこのヒトーーー！！

窓から降り注ぐ陽の光に、キラキラの金髪は白く輝き、後光を差してるみたいに
見える。
透き通るような白い肌は、それでも健康的に見えるし不思議だ。
少し明るいブルーの瞳を、まっすぐあたしに向けている。

ま、まさか。まさか・・・・ね。

「お初にお目にかかります。お嬢様。私（わたくし）が執事のセルジュ＝アクアマリン・ジュエルでございます」

耳に心地よい低音で話す、きれいな日本語。

こ、こんなきれいな執事ってあり得るの！？もっとキレイっていう王族ってどんなんよ！

と、ここまで思ってふと気付く。

セルジュ＝アクアマリン・ジュエル・・・

「あ、アクアマリン？？？」

さっきクリスティンさんが、「王族は宝石の名を持つ」って・・・。

思わず声に出し、それにセルジュさんのキレイな明るいブラウンの
眉がピクリと
上がった。

「あぁ・・もう聞いておいででしたか。私はこの国の第7王子です」

な、

なんで王子が執事！！！

執事さんは王子様（後書き）

アクアマリンが宝石で一番好き。

迷子の執事さん

王子が執事。

王子が執事。

王子が・・・

その衝撃に、口をあんぐりしていると、そんなあたしのあほ面にも

王子様だっていう

執事さんは、それはそれは素敵な微笑みを見せた。

「早速で申し訳ないのですが、おじいさまの部屋に参りましょう」

おじい・・・

あぁ！そうだった！あの時のおじいちゃんに会って、お悔やみを直接言いたい。

それに、今回はおじいちゃんにも日本から贈り物を持ってきたのだった。

そして・・そして・・このとんでもない遺産相続を断る。

そう、あたしはそのために、ここに来たんだった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

遠い・・・遠いんだけど・・・・

家の中なのに、こんなに広くて目的の部屋に行くまでの何十分もかかるなら
デカイ家なんて嫌だ!!!

最近リフォームしたっていう上司の3階建ての自宅を羨ましく思ってたけど、
今あたしはこじんまりした2階建ての我が家がとてつもなく懐かしくなった。

左隣には、長い足を持て余し気味に、あたしの歩幅に合わせて歩いてくれてる
王子様で執事さんが居る。
王子様で執事さんは・・・あぁ。めんどくさい!セルジュさんでいいや。

「セルジュさんは、どうして王子様なのにあたしなんかの執事になったんですか?」

「私は王子とは言っても7番目です。念のため、3番目までは王となる為の教育を
受けますが、健康上問題が無ければ1番上の兄が王になり、2番目、3番目は
補佐をします。

更に下は、他に仕事をする事になっています。
大体は城の中で、ですがね。私は、将来の王子・・兄の子供ですが、
その方の
教育係をするはずでしたので、執事のようなものですよ。主人が変
わっただけです」
はぁ・・・。でも将来の王子とあたしとじゃ大きな違いが・・。
ま。断るんだし。
「ご兄弟、多いんですね。うちは２人だから羨ましいです。皆さん
仲が良いんですか？」
「・・ええ・・そうですね」
あれ？なんだか・・セルジュさんの明るいブルーの瞳が・・微かに
揺れたような・・
「着きましたよ。こちらです」
目的地に着いたという言葉で、あたしの思考は止められてしまった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「わが国へ、ようこそ」

パリで見た時と、そんなに変わらずおじいさんは元気にあたしを迎えてくれた。

でも少し表情が暗い。

立ち上がったソファの近くのテーブルに、おばあちゃんの写真が置いてあった。

やっぱり・・寂しいんだ・・・。

「セルジュ、このお嬢さんと思い出話をするから、少し席をはずしなさい」

セルジュさんが、少し迷いを見せて部屋を出る。

「突然の事で・・驚いたであろう?」

「ハイ。おじいさんは、日本語がとてもお上手なんですね」

おばあちゃんは、かなりカタコトだったし・・思い出しながら言うと、

おじいさんは楽しそうに笑った。

「あれは、演技だよ」

「演技!?」

「そう。カタコトの日本語で話しかける変な外国人のばあさんの相手を根気強く

してくれたのは君だけだったよ。だから、君なんだ」

「へ？？？」

「君なら、変えてくれると思ってね」

「かえる？」

頭の中では＞帰る・買える・変える＜と色んな「かえる」がぐるぐると回ってた。

「いや、こっちの話だ。話は、受けてくれるのだろう？」

「へ？あっ、・・いいえ。申し訳ないですが・・あたしなんかじゃ、ダメですよ」

「・・・君だから、受け取って欲しいんだが」

「ええと・・私には必要の無いものばかりだし。世界が違うし・・」

「・・そうか・・残念だな。せっかくマンションも近代的にリフォームしたのに・・全部、断るのかい？」

どうしよう・・そんなに寂しそうにされるとは計算外だよ！！

うーーーーん・・・と考え込み、

「あの！！ここに時々遊びに来ていいですか？その時の搭乗券だけタダっていうのは

すごーーーく嬉しいですけど・・」

と言ったら、おじいちゃんはすごく嬉しそうにしてくれた。
あぁ～良かった。少し話しただけのあたしをすごく気にかけてくれたんだもの。
良ければ時々来たいもんね。

「では、そのように書類を書き換えよう。あとでセルジュから説明を聞いて
サインをしておくれ・・・と。セルジュも・・・断るのか？」

「・・・はい・・。私、ほんとにほんとに庶民なんです。どちらかと言えば・・
一番必要ないと言いますか・・・。」
相手が人なだけに、語尾がもにょもにょ小さくなってしまう。

そう言うと、おじいちゃんはあたしには理解できない言葉で何かをつぶやいた。
そうして、にっこり笑うと、「ではこの話は終わりだな。日本の話を聞かせておくれ」と言った。

小一時間位話しただろうか。

控えめなノックが響き、「お薬の時間ですが」と、メイドさんらしき人が
申し訳無さそうに入ってきた。

「おぉ、もうそんな時間か。すまん、もう年でな、薬を飲んで休まなくてはいかん。」

「いえ。あたしこそ、長くご無理させてしまってごめんなさい。あの、これ

日本から持ってきたんです。日本の、徳利とお猪口です。お酒は召し上がりますか？」

「あぁ、この年になっても酒は飲むよ」

「日本では晩酌って言って1日の終わりに1杯お酒を飲んで奥さんと話をするんですよ。

えっと・・・我が家だけかもしれないですけど・・・。

おばあちゃんの分もお猪口ありますから、1日の最後をおばあちゃんとゆっくり

過ごせるかなぁと思いまして・・。」

おじいさんは、にっこり笑って「それは良い考えだ。1日の終わりの話し相手は、

やはりエレンが良いからね。ありがとう」と言った。

喜んでくれたみたい。良かったー！余計悲しませたらどうしようかと思ったけど・・

パパとママの意見を聞いて選んで良かった！！

「やっぱり・・君が変えてくれると思うんだがの・・」

ホッと安心してるあたしには、おじいさんのつぶやいた言葉が聞こえなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

あらためて書類を作りなおすというので、その日はお城から行けるジュエル王国の
名所をセルジュさんが案内してくれた。
執事は断ったんだけど・・1人だと暇だし、地理もわからないからそのまま
お願いしてしまった。

けど、町に出てすぐ後悔した。

セルジュ王子はとんでもない人気者らしい。

様々な人が話しかけ、写真を撮り、どこぞのアイドルだ!?って騒ぎだ。

ナントカ寺院とか、ナントカ城とか、ナントカ公園とか色々説明されたけど
さっっぱり覚えていない。

夕方疲れて城に戻り、クリスティンさんにこの事を話すと、クリスティンさんですら
うっとりした表情で「セルジュ様は特別お美しいですから・・」と言った。

特別、の意味が分かったのはディナーの時。

兄弟が全て揃った時だった。確かに話の通り、全員驚くほど美形だ。
でもそんな中で、セルジュさんだけが確かに特別だった。
どんなに美形でも、彼の美しさの前では色褪せてしまう。
そしてゲストはあたしだけ。という、家族団らんの中でもセルジュさんの

完璧に紳士な態度は変わらなかった。家族に対してさえも、だ。
他の家族・・・第1王子ですら、少しくだけた様子で寛いでいたのに、彼だけが
仮面を被ったように、張り付いた微笑みで少し距離を置いて接していた。

なんか・・なんかもやもやする。他の方々はセルジュさんに対してもとても
親しげに接しているのに・・・。
明るく仲の良い我が家を思い出して、セルジュさんの態度がとても悲しく思えたのだった。

ま。断るからいいけど・・・もう、会わない人だし・・・

・・・・・・

でも気になるじゃないか!!!

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翌日、新しい書類を、これまた完璧な微笑みで説明するセルジュさん。

むかむか

むかむか

昨日のムカムカが、おさまらない。

「セルジュさんは、お兄さん達と仲が良くないんですか？」

一瞬ぴたりと書類の文字をなぞっていた美しい指が止まった。

「・・いいえ？どうしてです？」

「セルジュさんだけが、違って見えたから」

「どう、違って見えました？」

「キレイすぎた」

そう言うと、少し、キレイな顔が歪んだ。ほんの少しだけ。

「あなたも、私が特別だと思うのですか？私が第1王子よりも特別だと？」

あれ？なんか・・スイッチ入れちゃったみたい？

「私も、そう思いますよ。私が、王にふさわしいとね」

・・いえ、そこまで言ってませんが。

そしたら、美しさがどーの、学校の成績がどーの。スポーツが。国の大臣だってそう言って・・・と、どんどん

出てきたよ、鬱憤が！
え？こんなキャラだったんですか？
なんか別な意味でムカついてきたんですけど！愚痴王子かい！執事
拒否して良かったよ！

どんどん出てくるキツイ言葉。なのにセルジュさんの表情は反対に、
悲しげに、なんだか
泣きそうになってきた。

なんなんだ！？

「あの！！！」

大声を出してセルジュさんの言葉を止める。

驚いてあたしを見たセルジュさんの顔は、気持ちが高ぶっていたの
か少し赤くなっていて、
大きな瞳は揺れていた。
なんで・・なんでお兄さんより自分がふさわしいって言っときなが
ら、そんな
捨てられた子犬のような目をするの！
本当は、お兄さん達が好きなんじゃん！

大きく深呼吸をする。ここはあたしが落ち着いてなくちゃ。

「セルジュさん、この国を出た事は？」

「・・大学の時に・・留学しておりましたが」

いきなり話が逸れてびっくりしている。

「どんな大学？」

「イギリスの全寮制の大学ですが・・」

「そこから外出は？」

「時々は致しましたが、基本的には寮にショッピングモールやレストランもついておりましたのであまり出ませんでしたよ」

「て事は、ほとんど外を知らないんじゃない」

「・・・」

「この国で王になるって事は、お兄さんを王の座から追うって事でしょう？
でもさ、この世界ってもっともっと広いよ？他の世界を知らないのに、家族を
傷つけてまでこの国の王に執着するなんて！」

「・・・・・」

「王様より、もっとふさわしいものがあるかもしれないじゃない！」

「・・・例えば？例えば、何です？」

「・・・医者になれるかもしれないし、教師とか・・こ、コメディアンとか！」

「コメディアンはちょっと・・ご勘弁いただきたいですけれど・・」

段々感情的になるあたしとは反対に、セルジュさんの方は落ち着きを取り戻していた。

勢いとは言え、この完璧キラキラ王子にコメディアンと言った事が急に恥ずかしくなり、

「ううううるさいっ！」

と、書類にさっさとサインをして、部屋を飛び出した。

でも、一番言いたかった言葉を言うのは忘れなかったよ？

「王様だけが職業じゃないんだよっ！！！」

ん？王様って、職業なのか？

迷子の執事さん（後書き）

実はナルシスト愚痴王子デシタ。

同行者は執事さん

部屋を飛び出したあたしは、闇雲に城の中を走った。

すると。

柔らかな日が差す場所に出た。

そこには綺麗な花々な咲く中庭だった。

・・・あたしの「中庭」の概念からは遠く離れた広大な中庭だったけれど。

屋根が美しく曲線を描く、小さな東屋を見つけ、そこにぺたりと座り込む。

お金持ちって、色んな苦労も苦悩もあるんだろうけど、それでも庶民より
絶対幸せなんだと思ってた。
でもあれは絶対踊らされてるよ～～。大臣も言って・・って、それでその気に
なっちゃったのかな？
それで、あんなに愛情深く接してくれるご兄弟に対してまでも頑なになってたなんて・・。
悲しいよ・・・。

ふぅ。大きくため息をつく。

明日。帰ろう。うん、サインもしたし。あたしにはついていけない世界だ。

「日本からの可愛いお客様が、どうしてここでそんな大きなため息を?」

突然、柔らかいテノールが聞こえ、俯いていた顔を上げる。

あ。第1王子の・・・

「ジョルジュさん」

「どうか、したのかい?セルジュが何か失礼なことを?」

少し笑って、顔をふるふると左右に振った。

あたしに対してなんて、何もない。むしろ、彼はあなた達に失礼な事をしているのに・・。

セルジュさんよりも少し華奢な体つきのジョルジュさんが隣に腰を下ろす。

「セルジュさんは・・いつもあんな他人行儀なんですか？」

「・・・昔は、違っていたよ。誰よりも屈託のない笑顔を見せる天使のような子だった。
そうだね。イギリスから戻ってくるまでは」

イギリス？大学の時だ。

「イギリスには、今外務大臣をしている、叔父の義兄が同行してててね」

「外務、大臣・・」

『大臣だってそう言って・・』

さっきのセルジュさんの言葉が甦る。

「クーデターの噂があるんだ」

「え？」

「えーと。日本語で言うと、謀反？」

いえ、クーデターでわかりますが。

「・・・セルジュが加担しているという情報があってね」

「っ！！！」

話はそんなに大きくなっているの？
本気で・・・セルジュさんは本気でこの優しいお兄さんを傷つけようとしているの？

「セルジュさんは、お兄さん達をとても好きです！何かの・・間違いです。
きっと、巻き込まれてるだけです！」

「ありがとう。うん・・私達も、そう思うよ。でもね、たとえ巻き込まれているのだとしても
私は見極めて、裁かなければいけない立場なんだよ」

兄弟同士で・・・愛し合ってる家族同士でそんな事・・・。

どちらも、望んでないのに・・。

「遺産の殆どを相続放棄したって聞いたけど？それにはセルジュも含まれるのかい？」

「え？あ、ハイ。もう、サインもしました。明日・・帰国します」

でも・・セルジュさんどうするんだろう・・どうなるんだろう・・。
さっきまで目の前にあって、セルジュさんの綺麗な青い目が思い出されて仕方なかった。
とてつもなく、ざわざわと胸が騒いだ。

「サイン・・だけ？」

「えっ？何か、言いました？」

「いや・・この国も、少し騒がしくなりそうだから、明日帰国する
のは良い考えだと
思うよ。手配しよう」

立ち上がりながらそう言ったジョルジュさんは、物騒な物言いとは
裏腹に、少し
すっきりした表情をしていた。
この国が少し騒がしくなるって・・なんだ！？
セルジュさん・・・大丈夫かな・・王様の座狙ってるって、バレバ
レじゃん！！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

案の定その夜はまったく眠れず。
自分が色々と聞いてはいけない事を聞いてしまったんではないか。
まだどうにか
出来るんじゃないか。いや、あたしに何が出来るってーんだ！と、
頭の中は
その繰り返しだった。

「どうなさいました？顔色がよろしくないようですが」

早くに起きて朝食の場に現れたあたしの顔を見て、セルジュさんが
驚いたように言う。

対する君はどーしてそんなに活き活きとしてるんだ！？
今渦中の人なのに！！！
昨日の愚痴王子っぷりは何だったんだって位、それはそれは晴れや
かな顔をしている。

「セルジュと離れたくなくなったのではないか？」

からかうように言ったのは、昨日の会話が無かったかのように面白
そうに
目を輝かせているジョルジュさんだ。

「ジョルジュ兄さん、僕は彼女に捨てられたのですから。そんな皮
肉を言わないで
くださいよ」
笑って応戦するセルジュさん。

んん？？？な、なんだ！？なんだって今日はそんな普通の仲良し兄
弟みたいな
やり取りなんだ！？昨日のギクシャクはなんだったんだ？

もうわからない事だらけだ。おかげで、この国の絶品チーズオムレ
ツとパンを
味わう事も出来なかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

帰国するあたしに用意されたのは、あたしが記憶する飛行機とは随分形が違うものだった。

「コンコルドですよ。」

こっこれがあの!!!!

「もう使われてないんじゃなかったんですか?」

「そう。ジュエル王国が買い上げました。王室の自家用機として、王と王子がそれぞれ1機ずつ持っているんです。」

はぁーーーー!!!!!金持ちって!!!!

まぁいいや。乗れるなんてラッキーだ。滞在中お世話になった人達と、見送りに来てくれた王室の殆どの人達に挨拶し、セルジュさんの専用機だというコンコルド・セルジュ号（勝手に命名）に乗り込んだ。

タレント弁護士は先に出国していた為、帰国は1人だけれど、乗務員の方が2人も乗ってくれるらしい。至れり尽くせりだ!なんて贅沢!!これだと、1人でも暇じゃないね♪離陸態勢に入り、窓から外を覗いて手を振る。

・・あれ？

「セルジュさんがいない・・」

ぽつりとつぶやくと、後ろから「ここに居りますよ」と低い良い声がした。

「え！？どうして！！！！」

なんでセルジュさんが一緒に乗ってるの！！！

「私はあなたの執事ですから」

「違うでしょう！放棄しますって書類にサインしたもの！」

「サイン・・・ね。判は、押しました？」

「は！！！はぁ～～！？」

セルジュさんは、やれやれ。といった感じに肩を少しすくめた。

「先祖は日本語だけ広めたわけでは無いのです。印鑑も広めたのですよ。

ジュエル王国の公式書類には捺印が無いと無効となります」

「き！昨日言ってくれなかったじゃないですか！」

「お部屋を飛び出されましたし」

ふふ。と綺麗な笑顔を見せる。
「私はおっちょこちょいな主人を持ったものです」

え！あたしの所為ですか！！

「執事なんて！無理です！あの、すぐまた書類作って国に帰ってください！」

「書類は、昨日の日付でしたから、もう無理です。それに、私はもう国に帰れません」

「今はもう無理だけど！日本に着いたらトンボ帰りで・・」

「いえ。そういう意味ではなく。
クーデター計画がどこからかバレましてね。大臣は失脚。私は加担したとされて
しばらく国を出なくてはいけなくなりました」

言ってる事ば物騒な事なのに、またもや晴れやかなキラキラ笑顔を見せ、爽やかに
言ってくれちゃった。

「つまり・・・」

「これからよろしくお願いしますね、お嬢様」

ニコリ。

同行者は執事さん（後書き）

結局はお持ち帰り。

執事さんは居候

イタイ・・・・

人の視線が痛いなんて、生まれて初めての経験だ。

地元の小さな空港は、アジア数カ国の直行便がある、一応は国際便も飛ぶ
空港で。

だからってこんなコンコルドが来ると、それはそれはエライ騒ぎで。

どこにそんな人が？って位に集まった中、たったの2人で出てきたらそれはそれは注目の的。

しかも一緒なのがこの超美形の、セルジュ＝アクア・・・おっと。

今は、セルジュ・ロマーニさんだった。

今、勘当状態のセルジュさんは、名字＝国名。しかも王族しか持てないという
宝石の名も語れず、母方の姓を名乗る事にしたらしい。

ていうか・・本当にこの人、あたしについて来る気だろうか。

今、人々の視線は、セルジュさんがほぼ独占している。
シンプルな細身のスーツだけれど、それでも一目で高級品だと分かる。
しかも中身が金髪碧眼のモデル並みの美男だ。

ついて来るの？ついて来る？ついて・・・来るよなぁ・・・。
あぁ～・・どうすれば・・・。荷物が出てくるのを待ってる間、それればっかり考えていた。
とりあえず、ひとりになりたい！この視線に耐えられない！（たとえ全員がセルジュさんを見ていても！）

「えと。トイレに行ってきます！」

「でしたら、荷物を受け取りまして、ロビーでお待ちしております。」

1人になったところで良い考えなんて浮かぶはずもなく・・。
迎えに来ているであろうママに、何て説明しようか考えながらセルジュさんの
ところに向かうと・・・

キラビヤカな人が・・・増えてた。

程よく髪に白いものが混ざったブラウンの髪をした、４０代くらいのおじさまが
セルジュさんに分厚い封筒を渡していた。
その顔立ちは整っていて。ジュエル王国の人だなと一目で分かる。

「あのぅ」

「あぁ、お嬢様。ご紹介致します。日本のジュエル王国大使の、リチャードです」

にっこりと挨拶するリチャードさんは、とっても人の好い笑顔をしていた。

って、そうじゃなくて！

「そそそ、その封筒、もしかしたら遺産放棄の書類とか入って・・」

「なワケないじゃないですか。私が日本で暮らす為の、諸々の書類です」

がふーーん！

やっぱり・・・ついて来る気なのか・・・。

その時。

「みはるちゃんっ！」

あ。ママがロビーで待ってる事を忘れてた・・・・。

基本お気楽で、ミーハーなママはセルジュさんの登場に浮かれまくっている。
一緒に車に乗る事のも違和感は感じてないらしい。
なんで！？

いつの間にか、リチャードさんはいなくなっていた。
この首都から遠く離れたこの地に、わざわざ封筒だけを届けに来たのか！？

あわあわしていると、荷物はあっという間にトランクに積み込まれ、後はあたしが
乗るだけになっていた。

「セルジュ・ロマーニと申します。お嬢様の執事として日本にやって参りました。
以後、よろしくお願い致します。奥様」

「おーくーさーまーー！！！！」

奥様、と呼ばれ、ママは一層ハイテンションになった。

あの、ママ・・・あたしが相続放棄に失敗した事はどーでも良いの？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

我が家は小さな2階建てだ。

1階にはリビングダイニングキッチンと、水周り、両親の部屋と、
死んだお祖母ちゃんが
使っていた和室。
2階にはあたしの部屋と、お姉ちゃんの部屋が向かい合わせになっ
ていて、
廊下の突き当たりにトイレと小さな洗面台があった。

こんな小さな家に、こんなゴージャスな人が住めるわけない。

が、頼みの綱のパパも、セルジュさんを快く迎えてしまった。

元々パパは社交的で明るいママをニコニコとサポートしてるような
穏和な人だ。
でも、こんな時は父としての威厳と見せてくれると淡い期待を抱い
ていたのに・・。

「それで・・・執事というのは、具体的にどんな事を？」

「そうですね。主人のスケジュール管理や、訪問客の管理ですとか・・・
身の回り全般ですね」

「ウチは見ての通り小さな家だ。管理が必要な程忙しくもないし、お客もそうそう
無いよ」

「つまり、私が特にする事は無い、と？」

「そうだね。第一、こんな家のローンもまだ残っているような私達だ。君がみはるの
執事だと言うのなら、当然、給料が発生する。
この子も、ウチも君に払える程余裕は無いんだ」

！！！そうだ！！！
執事って事は、あたしは雇い主って事なんだ！！さすがパパ！一家の大黒柱！
目の付け所が違うね！！！と思ったと、同時に。

どうしよう・・ただでさえビンボーなのにっ！自分の懐具合も心配になってくる。

パパの、にこやかにはしているけれども鋭い指摘に、最初少し目を見開いてた
セルジュさんだったけれど、またにっこりと笑顔を向けた。

「大丈夫ですよ。相続した遺産の中には、おばあさまが遺されたパリのマンションも
含まれます。
そのマンションの収入がかなりの額でして・・。
私はその中からお給料を頂きますし、それにマンションの管理人と
連絡を取って
色々指示も必要になります」

マンションって、パリなんだ。じゃあ、フランス語がまるっきりダメな
我が家にはどうする事もできない。

「そうか。では今日から我が家の一員だ」

お給料の面がクリアになったら良いらしく、パパはあっさりとセルジュさんに
握手を求めた。

うそーーーーん！

「だ、だって、部屋！部屋は！？」

「みさきの部屋があるだろう」
「おねえちゃんの部屋が空いてるでしょう」

ふたりに同時に返された。確かに。お姉ちゃんは3年前にお嫁に行って、
今は向かいの部屋は空いていた。けど！

「みさきには里帰りの時は、和室を使ってもらったら良いさ。」

ソ、ソウデスカ・・・。

3対1じゃ、断然分が悪い。

「あれ?でもさ、じゃあセルジュさん、日本では何をするの?マンションも外国なんだし」

「お車の運転などは?」

「いや、あたし基本チャリだし。」

スケジュール管理も、運転手も必要ない。

「では今は特に何も・・・・」

それじゃ単なる居候じゃないか!!

「おはようございます。お嬢様。」

ちゅ。

んーーーーーーーー・・・なんか柔らかいものがオデコに・・・。

ちゅ。って何だ？

寝ぼけた頭で考えても、それは何だかよくわからなくて。

「むーー。もうちょっと」

「仕方ないですねぇ」

ちゅ。

今度は左の頬に柔らかい感触が。

違うよ、もっとは「ちゅ。」とか言うものじゃなくって、寝させてくれって意味で・・・

って!!!!

一気に目が覚めて飛び起きる。

目の前には優雅に微笑むセルジュさん。

「何!今の、今の何っ!?」

あわあわするあたしに、セルジュさんは益々にっこり笑った。

「お目覚めのキスですよ?もっととおっしゃるから・・」

「ち、違ーーう!」

朝の自宅に、あたしの声が響きわたった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

起きてみると、もう１０時。
よっぽど疲れていたんだな、あたし・・・。
パパは当然会社に行っていたし、ママもパートに出ていた。
「お嬢様は、お仕事は何をされているんですか？」
「あたしは、駅前のショッピングモールに入ってる雑貨屋さんで働いてるの。
でも今ショッピングモールが改装工事でね。お休み中です。
・・あの、お嬢様って言うの・・やめてもらえません？」
なんだか背中がもぞもぞする。
「それは・・・そうですね、今日１日、私に付き合ってくださったら考えます」
「今日１日？」
「ええ。この街を案内してくださいませんか？ついでに身の回りの物を少々揃えたいんです」
「あぁ！そうだよね。うん、わかった！」

今、お姉ちゃんの部屋は家具も何も置かれていない。
ベッドも無くって、昨日セルジュさんはお客様用のお布団を出して
客間になってる和室を使ってもらったんだ。
でも背の高いセルジュさんにはあまりに小さくて・・。

「セルジュさんって、身長何センチあるの？」

「１８７ｃｍです」

・・・そりゃ、足がはみ出るわ・・・。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――

と、いうワケで、今お買い物中だ。
ママにはもう車を借りる約束を取り付けてたみたいで、駅から少し
離れた
大型家具店と、家電量販店などが並ぶ通りにやってきた。

セルジュさんの運転で。

なんとこのお方、国際免許証を持っていたのだ。

「いずれは日本の免許証に切り替えますよ」

はぁー。国際免許証なんてモノの存在も、今初めて知ったあたしに

はマッタク
分からない話だ。

「みはるさん、まずは家具を見たいと思うんですが・・」

「はーーい」

交渉の結果、呼び名は「みはるさん」に落ち着いた。
まだ少しくすぐったいけど・・・お嬢様よりもはるかにマシだ!

ついでに、今朝のようなあの・・お目覚めのキスとやらも止めて欲しいと
お願いした・・どちらかと言うと、呼び名よりも強くこちらをお願いした。
んだけど・・・こっちはあっさりと断られた。なんで!?

「みはるさんは、執事をいうものをわかっていませんね」

「え!世の中の執事さんはキスで起こすの?!」

すると彼は、にっこり笑うだけだった。

え?嘘でしょ?だって、主人が男だったら?え??えーー!?
嘘だ・・あり得ない・・そう思いながらも、執事さんなんて他に知らない
庶民なあたしは、いくら考えても答えが出せなかったのだ。

「まずはベッドにタンスに・・・デスクとソファと・・」

セルジュさんは足取りも軽く、店内を歩いていく。

セルジュさんは背が高いから、大きめのベッドじゃないと窮屈だろうな・・。

そう思っていると・・・

「あ。これ、良いですね。これにしましょう」

セルジュさんの視線の先を見ると・・・・・

そこにはどでかいベッドが鎮座していた。

え?何これ!何だこのデカさ!!

だ、だぶる??? いや、違うな・・。

立てかけてある商品説明を見ると・・・

『クイーンサイズ』と書いてある。く、クイーンサイズ!!!!!!

「キングサイズはこちらのお店には無いのでしょうかね・・・」

え!?まだデカイのを探しているのか!?

指差しているベッドがベッドだけに、目を輝かせた店員が小走りで寄ってきた。

「こちらのベッドをお求めですか？」

「ええ・・ですがキングサ・・」

「買いませんっ！」

更に大きなベッドを聞こうとしてたセルジュさんを遮る。

「あのね、部屋は8畳なの！ベッドしか置けないじゃん！」

「あぁ・・そうですか。失礼。もう少し考えるよ」

あっさりと店員を追い返したセルジュさん。

こ、この人って・・・・・！

その後も、選ぶもの選ぶもの大きすぎたり、高すぎたりで、殆どのものを
却下した。

買い物を済ませ、店を出る頃にはヘロヘロだった・・・。

「セルジュさん・・部屋に入るかどうか、大きさ考えて買い物しないと・・」

「すみません・・。今まで部屋の大きさを考えて買い物をした事がありませんでしたので・・」

こ、このセレブめ！！！

もう・・・先が思いやされるよ・・・

セレブな執事さん（後書き）

ダブル以上の大きさって実はピンときません。
根っからの庶民デス。ハイ。

「北海道の親戚がね、蟹を送ってくれたのよ～！だからコレ、おすそわけ」

５軒お隣の高田さん（推定４０代前半）が、ニコニコしながらそう言った。

５軒離れておすそわけって・・・。
それにはワケがある。

受け取ったあたしの背後に目をやり、用事が済んだにも関わらず、帰ろうとしない
高田さんの目的は・・・。

「すごい！大きな蟹ですね。ありがとうございます」

いつの間にやら現れたセルジュさんが、にっこり微笑みお礼を言う。

そう。お目当てはセルジュさんだ。

セルジュさんが我が家にやって来て1週間。

目立つ美貌は、一気にご近所の評判になった。

昨日は博多の、有名だとかいう明太子を頂いた。
その前は、東京で行列が出来るというお店のプリン。
それから新潟の親戚からもらったというお米を20キロ、うんしょ
うんしょと持ってきた
ツワモノも居た。
あたしはその日、たまたま外出していて、帰って来たら玄関先でお
米袋を横に置き、
重い荷物を持ってきて汗だくになったのを一生懸命化粧直ししている
高田さんとは反対方向の7軒隣の野村さんの奥さんを目撃してしま
ったのだ。

セルジュパワー、恐るべし!

しかも、新潟のお米に博多明太子は、最高最強の組み合わせだった!
あれはウマかったーーー!

って。そうじゃなくて。

ここはセルジュさんにまかせて、あたしはもう一度お礼を言ってさ
っさとキッチンに
向かう。
お礼を言ったところで、高田さんはもうあたしの事なんて見ていな
い。
セルジュさん!後は頼んだよ!

「ママ！今日は高田さんから蟹がきたわ。すごいね〜。お鍋で食べたいな〜」

「あらまー。一応、ママからも高田さんにお礼を言ってこようかしら」

パタパタと向かうママだったけど・・・多分高田さんはセルジュさんとの
時間を邪魔されたくないと思うなーー。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「みはる、ショッピングモール来週改装オープンじゃない？」

「うん。あー。こんなに蟹を食べるなんて久しぶり！美味しい〜」

「ほんとにね〜。で。ところでお店から何も連絡無いの？」

「？うん。だからいつもの時間に行こうと思って・・・なんで？」

「高田さんが話してたんだけど・・・ちょっとモール側と店舗側が
揉めてる
らしいわよ」

「お嬢様は、雑貨店でお勤めなんですよね。」

あ。まただ。どうも、他人の目がある時だけ「お嬢様」は止めてくれるらしい。

段々慣れてきた自分も怖い。

「そう。地元の若い芸術家の作品を置いてるお店なの。」

「お嬢様も何か作られているのですか？」

「作ってるって程でもないの。でも色々勉強になるから、働かせてもらってるの」

ホラ、と見せたのは、最近作った物。

手作りと言うにはおこがましい作品だ。

ジュエル王国は、その名の通り様々な宝石も沢山採掘できる事で有名らしいんだけど、

さすがにお小遣いでは買えない。

そんな時、小さなガラス玉に、宝石の欠片が入ったのを見つけた。

とっても綺麗だし、入ってるのが欠片だからか、とても安かったので記念に

買ってきたんだけど・・・ガラス玉は持ち歩くのに不便なので、得意の針金細工で

ガラス玉を囲み、ストラップを通して携帯につけた。これで、いつも持ち歩ける。

「ジュエル王国で買ってきたの」

「これは・・宝石加工の時に除かれる欠片・・？」

「そう。これなら安いし、持ち歩けるでしょう?」

と、そこで手にしていた携帯が振動した。

「あれ?まゆさんからだ・・・」

まゆさんというのは、雑貨店を営む店長だ。
地元の大きな画材屋さんの専務夫人で、自身は編み物が得意で、このお店を開店した。
10歳違うのだけれど、とっても気の合う、友人のような存在だ。

「もしもし??」

「みはるちゃん!どうしよう・・・大変なの。お店、畳まなきゃいけないかもしれない・・・」

「ええっ!?なんで!??」

「モールを改装したでしょう?それで、お家賃が変わるかもしれないとは
改装前の説明会で聞いていたんだけど、倍額なの!うちみたいなお店じゃとても・・」

ば、倍額ですとーーーーーー!!!

動揺するまゆさんに、「何か方法考えますから！」とは言ったが、そんな・・・あたしに何ができると言うのだ・・・。

食卓に戻ったあたしは、一気に食欲が無くなっていた。

あぁ・・・蟹さん・・・。

「お店のお家賃、上がるからお店続けられないかもって・・」

「あら。高田さんが言ってたのもそれかしら」

「多分・・・倍額だって！うちみたいな小さな店じゃ、無理かもしれない・・」

「それは・・・お店の売り上げ次第。と言うことですか？」

突然、会話にセルジュさんが割って入った。

「・・・そうなる、かな。売り上げが伸びたら高いお家賃も払えるし」

セルジュさんが細く長い指で顎をなぞりながらなにやら考えこんでいる。

「お嬢様」

「うん？」

思わず返事をしてしまった。あぁ・・慣れって本当に怖い！

「これ・・・売りませんか？」

あたしの手にあるストラップを指差す。

「この欠片は、大体は処分されるんですよ。手軽に買える土産用に、試しに
ガラス玉に入れてみたのですが、お嬢様ならもっと良いアクセサリーにできそうだ。
もっと色々な種類の宝石の欠片がありますよ。
取り寄せましょうか？勿論、ジュエル王国の宝石だという保証書もつけますよ」

勿論、あたしはそれに飛びついた。

「ほ、本当！？」

「えぇ。かなりの数が手に入るはずです。今ある物は全て日本に送らせます。
この宝石のガラス玉が手に入るのは、これからはお嬢様のお店だけ。
という事です」

「ありがとう！！あたし、何か方法を考えるってまゆさんに言ったとこだったの！
あたしの針金細工でも役に立てるかもしれない！まゆさんに早速電話してくる！」

急ぐあたしの背後では、こんな会話が繰り広げられていた。

「あんなに喜んじゃって・・・お店以外にも理由はあるわよ、あの

子ったら」

「え？」

「モール内の別なお店に、憧れの人がいるのよ～～。これで横井くんと離れずに済むもの」

「ヨコイ・・・ですか・・」

「まぁ、憧れてるだけらしいけどね。彼はかなりモテるらしいから」

「・・・そうですか・・」

「まゆさんに報告してきた！あたしもお店のために頑張らなきゃ～～！

それには腹ごしらえだよね～。蟹さーーん！」

なんとかなるかも！と思ったら、急にまた食欲がわいてきた。

なんて現金なんだ。あたしのオナカ。

・・・と。

今度はセルジュさんのお箸が止まってる。

「どうかしたの？？」

「いえ・・ちょっと食欲が・・・」

「じゃあ、その大きな蟹足ちょうだい！」

あぁ～～。蟹はやっぱりおいし～～い！！

救世主は執事さん（後書き）

ウチも毎年北海道の親戚より立派な蟹を頂きます。
ありがたや～～。

執事さんは破壊王

「ふっふふ〜〜ん♪」

思わず鼻歌うたってても仕方ないと思う。キラッキラだ。乙女の夢なのだ。

今あたしは、セルジュさんが取り寄せてくれた宝石の欠片入りガラス玉を
ハート型に型どった針金細工の中に入れる作業をしていた。

今作業をしてるガラス玉の中の宝石が、キラッキラ輝くダイヤモンドなのだ。

欠片の大きさはまちまちだ。蛍光灯の灯りに、キラキラと色んな方向に
光を反射させている。

「売れたらいいなぁ〜。お店の存続は、君にかかっているんだよ〜」

まだ、彼に会いたいもの・・・。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――

「同じショッピングモールに働く、ヨコイ。」

それしか、情報は無い。

それでも、専門家に調べさせた。

が。

今手元には、３名の写真とデータがある。

同じショッピングモールで働く、「ヨコイ」という名の男性は３名いるらしい。

これでも減ったのだ。ショッピングモールは結構規模が大きいらしく、店舗数にして

１５８店舗あった。その中に、ヨコイ姓は８名。

まず、女性は排除した。それに、４０代以上の既婚者も。

そして、残ったのが３名。

そうだ。

たしか旦那さまが、「彼はもてるらしい」とおっしゃっていた。

改めて、３人の写真を眺める。

・・・・どれももてそうには無いが・・・。

私の方が数倍カッコイイではないか！
コイツなんて、目が細い。こっちは眉を整えすぎてる。
こっちは、日焼けしすぎだろう！こんがり焼けたトーストのようになっていた。

胸に苦いものがこみあげる。

ヨコイ、か。お嬢様の職場復帰は明日から。
もう少し、情報が欲しいな。
それには・・・・・

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

コンコン。

控えめなノックの後、これまた控えめに問いかける声が聞こえてきた。
「お嬢様、今よろしいですか？」
セルジュさんだ。

「はいはーい。どうぞー」

カチャリとドアが開いて、セルジュさんが入ってきて・・・・

バキッ

変な音がした。

視線はずっと手元の針金に集中させていたが、音の出処が気になって視線を
そちらに向けると・・・・

「申し訳ありません。お嬢様・・・・」

「のあああああああああ!!!!」

セルジュさんの手には、たった今、息を引き取ったあたしの携帯があった（泣）

携帯は、セルジュさんが新しいものに変えてくると言って聞かなかった。
確かに踏み潰された時はショックだったけど、ドアの近くの床に置いてたあたしも
悪いし、明日仕事帰りに携帯ショップに行くからいいよーと断ったのだが、
その仕事の連絡が携帯にきたらどうします?と言われ、ちょうど今

から
買い物に行こうと思っていた。というセルジュさんに、携帯を預けた。
買ってそんなに間もないし、確か何かの保障サービスに加入してたハズ。

2時間ほど経っただろうか、晩御飯のためリビングに降りると、ちょうどセルジュさんが
帰宅した。
手には、新しくなった同じ機種の携帯を持っている。
ついでに、自分の携帯も契約してきたようだった。
あたしの携帯の色違い。セルジュさんはその目と同じ、明るいブルーの携帯だった。

「赤外線で、もうデータは交換してありますからね。」

あたしの携帯まで買わされたにも関わらず、なぜかセルジュさんは上機嫌だった。

「あ、ありがとう?」

なんだろう、なんか・・・胸騒ぎがするんですけど!?

翌日、今日から出勤だ。
はりきって、出かけようとしたところに・・・・・

「お嬢様、送りますよ」

「へ？いいよー。チャリで行くしー。それに車はママが乗って行っちゃったよ？」

「あぁ・・まだ申し上げていませんでしたね。実は、お嬢様の自転車、昨日
壊してしまったんです。どうも私は自転車というものに乗ったことがなくて・・」

！！！こ、この人は朝っぱらから爽やかになんて事を言うんだ！

「こ、壊した？？」

「ええ。申し訳ありません」

どうしよう・・歩いて行くには時間がかかるし、電車で行くにもうちの最寄り駅は
モールと正反対の方向に歩いて１５分のところにある。
行きたい方向と逆方向に１５分も歩くなんて、なんか腑に落ちない。

「それで、昨日私が車を買いましたので、それでお送りします」

「は！？車！？」

「ええ・・だって私が自転車を壊してしまったら、お嬢様がこれから通勤時に
困りますでしょう？」

困りますけど・・・なら、自転車を直すとか、買うとかの方が、断然出費は

少なかったと思うんですが・・・。

セルジュさんは、いつの間にか家の近くの月極駐車場まで契約してたようで、
「車をまわしてまいります」と軽やかな足取りで出て行った。

わからん・・・どうにも、セレブ王子の考えてる事はわからん。

こんな様子だと、運転してくる車だってきっと・・・・・。

ヤッパリ・・・。

ピカピカの車には、予想通り、これまたピカピカのベンツマークが・・・。
セルジュさん・・・やっぱり自転車、直した方が全然安いじゃん・・・。

でも知らなかった。ベンツって、あたしはおっきくて、四角いイメージがあったんだけど、
目の前にスッと静かに止まった車は、流線型が美しく、形もコンパクトで
可愛らしい。それに・・これもセルジュさんの瞳と一緒のライトブルーだ。
あたしは一瞬で、この子が好きになってしまった。

だからって、こんな高価なものに慣れてないあたしは、すぐには近づけない。

ドアを開けようとして、うっかり時計をぶつけてしまったらどーすんだ！
あぁーこれだから貧乏性は・・・。

戸惑ってると、セルジュさんが降りてきてわざわざ助手席のドアを開けてくれる。
そっか。いつもと反対なんだ。

セルジュさんの運転する車は、夢のような乗り心地で、モールまではあっという間だった。
入り口でいいと言ったのだが、セルジュさんはそれを無視して地下の駐車場に
入って行く。
車をエレベーター近くに止めると、セルジュさんも降りてきた。
「どうしたんですか？モールはまだ開店してませんよ？
今日からオープンまでは、お店の開店準備だけだから、入れませんよ？」

「ええ。それは奥様から聞いています。でも、準備だからこそ、男手が必要でしょう？」

手伝うのだと言って聞かないセルジュさんに押し切られる形で、結局は
一緒にエレベーターに乗り込んだ。

執事さんは破壊王（後書き）

結構強引。そしてマイペース。

暗躍する執事さん（前書き）

暗躍って程でもないけれど・・・。

エレベーターを1階で降りたところで、「あ。」とある事に気付く。

そういえば、職場は以前携帯の電波が入りにくく、お客様から不満も出たりしていた。

今回の改装で携帯のアンテナ設置も行われる予定と言ってたけど・・・

結局どうなったのかな。

あたしも結構不便な思いをしてたんだよねぇ・・・。

確かめてみようと新品ピカピカの携帯をバッグから取り出した。

うん。3本立ってる！

まゆさんのお店は1階とはいえ、モール自体が斜面に立てられているので、

半地下のような場所にあった。

だから心配してたんだけど、半地下でも大丈夫なようだ。

そういえば・・・昨日壊れた時、元々あったデータって大丈夫だったのかな。

昨日交換されたセルジュさんの番号が唯一のデータだったりして・・・

「あ！ちゃんと残ってる！」

「何がですか？」

「携帯に入ってたデータ！壊れた携帯から引き出せたんだね！」

良かったぁ～～！
喜んでいると、隣を歩いていたセルジュさんが一瞬歩みを止めた。
「ん？どしたの？」
「いえ。何でもございません。お店の場所はこちらですか？」
「ううん。こっち。」
さりげなく話題を変えられたのにも気付かず、あたしはセルジュさんをお店の方向に案内した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

お嬢様の思い人は『横井　新太郎』
あの写真の、目の細いメガネをかけた男だった。
データを求めていたものの・・・携帯を踏みつけてしまうとは思わなかった。
もっとも、そのおかげでどの「ヨコイ」か分かったわけだが・・・。
横井新太郎、２７歳。

モール内の、時計店に勤める男。
性格は、紳士的に見えて・・・・野心家。
本当は東京にある本店で働きたいと思っている。
そのため、付き合っている女性もいない。
このモールでの勤めは、単なる踏み台だと思っているようだ。
自信家でもある。か・・・。

お嬢様との出会いは、お互いの職場の飲み会が同じお店で行われており、
なんとなく合同のようになったらしい。

改装前は、同じ半地下のフロアにその時計店はあったが・・・
改装後は、時計店だけが2階に移った。

「ここでーす！」

お嬢様の声で、店の前まで来た事に気付く。

「ちゃんと名前で呼んでね！」

私にだけ聞こえる小さな声で言うと、店の奥に向かって元気に挨拶した。

「おはよーございまーす！まゆさん。お久しぶり！」

奥から、お嬢様よりも年上の、小柄な女性が出てきた。
ゆったりしたワンピースにレギンス、明るい茶色のふわふわした髪の、

少女のような女性だった。
・・・とは言っても、彼女の事も、もう既に頭には入っていた。
少女のような容姿で、少女のような話し方。
でも、それは見かけだけ。実際はとても芯の強い、熱い女性(ひと)だ。
結構な、曲者だ。
今も、頼りなさげな風貌で、でも目は強くしっかり私を見ていた。
しっかり見極めようとしてるように。
この人は・・味方にしておいた方が良さそうだな。

「はじめまして。セルジュ・ロマーニと申します。今、みはるさんのお宅に
お世話になっています。開店準備という事で、男手があった方が便利かと
思いまして、お手伝いに参りました。」

そう言って、にっこりと笑顔を返した。
今までは、周りにもっともっとやっかいな人間がいた。
大切なものを手に入れるためには、そんなにカンタンに本性なんか、
見せない。

値踏みするように見ていた厳しい瞳のまま、
「店長の川田まゆです。嬉しいわー。じゃあ、今日はよろしくお願いしますね」

そう言うと、「みはるちゃん!こんな素敵な男性が居るなんて聞いてないわ〜」と
言いながら、早速引き離しにかかった。

これは・・・先が思いやられるかも・・。

予想通り、棚の設置やダンボールを倉庫から運んだり、なかなかハードな役目だけが
回された。
休んだのはランチの時だけ。
根を上げるのを期待していたようだけれども・・・こう見えてずっと鍛えている。
着々と、言われる仕事を片付けていた。

その時

「いたっ！！」

「！大丈夫ですか？どうされ・・どうしたんです？」

「大丈夫。ぶつけただけ・・」

大丈夫とは言うが、設置途中の棚の金具にぶつけたらしい膝からは少しだが
血が出ている。

「店長、みはるさんを医務室に連れて行ってきます」

「お願い。医務室の場所は2階の奥のオフィススペースよ」

「ごめんなさい・・」

立とうとするお嬢様を、一気に抱き上げた。

「ひゃあ！」

「無理して歩かないでください。ひどくなったらどうするつもりですか。」

医務室は2階・・・好都合だ。

エレベーターよりも、動いていないエスカレーターの方が、近いな。それに・・・人目につきやすい。

ずんずん建物の中央のエスカレーターに向かう私の行動に、お嬢様が焦り出した。

「ちょ・・！エレベーターで行けばいいでしょう?」

「遠回りになりますから」

「そうだけど・・あの！恥ずかしいから降ろして」

「ダメです」

2階に着くと、お嬢様の抵抗はもっと激しくなった。

何度頼まれても降ろすつもりなんか無い。

このフロアには、あの男も居るのだから。

暗躍する執事さん（後書き）

お姫様抱っこは、やっぱ永遠の憧れですよねぇ。

結構重いハズなのに。

まるで、重さなんて感じていないかのように、あたしを横抱きにして、

ずんずんずんずんと歩いて行く。

横抱き・・・・つまり、俗に言う『お姫様抱っこ』だ。

ひ〜〜〜!キャラじゃないんだけど!!!

恥ずかしいよ〜〜〜。

セルジュさんに密着している、体の右側と、思った以上に逞しい腕が回されている

膝裏と、背中から脇にかけてが・・・・熱い。

は、恥ずかしい・・・・。

でもきっと、2階には従業員用のエレベーターで行くはずだから、

人目につかずに・・と思ったら。

セルジュさんはずんずんと、速度を落とさずに建物の真ん中の吹き抜け部分の

エスカレーターに向かっていた。

「ちょ・・！エレベーターで行けばいいでしょう？」

焦って言ってはみたものの・・・

「遠回りになりますから」

確かにそうだけども！！！

「そうだけど・・あの！恥ずかしいから降ろして」

ちょっと、お願いしてみるも・・・

「ダメです」

即答かよ！！

準備中の為まだ動いていないエスカレーターを、セルジュさんはあたしを
抱き上げているとは思えない軽やかさで上っていく。

だぁぁぁぁ！！！2階にこの状態で行くのは嫌だ！！

もう、ただでさえ人目についていた。
存在するだけで目立つセルジュさんが、お姫様抱っこをして颯爽と歩いていたら、
それはそれは目立つ。

でも困る！！だって2階には・・・

「おーろーしーてーー！」

どうしても降ろしてもらわなきゃ、困るんだってば！！！

「お嬢様、暴れると落としてしまいますよ？」

バランスを崩したのか、セルジュさんの腕から、一瞬背中が飛び出しかけた。

「やぁっ！！！」

落ちるのは怖い～～～～！１８７ｃｍからの落下は、相当痛い！！

必死でセルジュさんにしがみついた。その時。

「・・日野さん？」

背後で、ずっとずっと聞きたかった声がした。

折りしもあたしは、落ちかけた恐怖からセルジュさんに必死にしがみついたとこで。

しっかりとセルジュさんの首に腕を回していて。

傍から見たら、そりゃ～抱きついてるようにしか見えず。

あたしの耳が、セルジュさんの柔らかいキラキラ金髪でくすぐったく感じる位に

密着してる時だった。

今！

今ですか！なぜこのタイミング！！！

振り返るに振り返れない・・・なんとか、「人違いです」って感じで通り過ぎよう。
そう思ったのに！

なぜ！！！なぜ止まるんだセルジュ！！

「よ、横井さん！えっと、あの、足を・・ぶつけてしまって、あの。医務室に・・」

出来る限りセルジュさんから離れて（でも落とされない程度に）必死に説明するも・・
なぜか、横井さんは厳しい表情でセルジュさんを見ていた。

あの～ぅ？話しているのはあたしなんですが～？

「失礼ですが、あなたは？」

セルジュさんが、今まで聞いた事がないような冷たい声で聞く。

「N時計店の横井と言います。日野さんとは・・友人です。あなたは？」

・・・・・・・・・・・・・・

・・・しまった！！！

人に聞かれた時に、セルジュさんをどう紹介したらいいのか、まだ考えてなかった！

まさか正直に執事っていうワケにもいかないし（ウチは庶民だから）、

遠縁？？いやいや！どっからどうなっても親類っぽくないし！

ど、どうしよう？

と、ひとりあわあわしていると・・とんでもない爆弾が投下された。

ふ。

頭上で、セルジュさんが柔らかく笑った。

へ？思わず見上げると、そこには蕩ける位の甘ったるい表情をしたセルジュさんが。

「みはるの、婚約者です」

な、何ですとーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！

「！横井さん、違・・・・いったぁ！！！」

違う。そう言いかけたら、脇に鋭い刺激が！

「足が痛むの？ごめん。早く行こうね。では、失礼」

瞬く間に、遠くなる横井さん。

チガウ！足じゃなくて！今！脇の肉をつねった～～～！？

「な、なんでつねるの！」

「私が？何をおっしゃっているのですか」

つねったじゃん！！！

思いっきり睨んでも、セルジュさんは相変わらず甘ったるい笑顔を向ける。

むーーー。

諦めて後ろに視線を向けると・・・・

セルジュさんの背中越しに見える横井さんは、いつもよりちょっと硬い表情をしていたように見えた。

執事さんの牽制（後書き）

主人をつねる執事。

執事さんの誘惑

売れた。

売れまくっているのです！
あたしが作った針金細工～～～！（宝石の欠片ガラス玉入り）

宝石好きには高嶺の花だったジュエル王国産の宝石が欠片だけど入っていて、
しかも扱っているのがこのお店だけという事で、段々とお客様が増えていったのだ。

まゆさんは、これでお店を続けていけるかも！
この調子で頑張ってちょうだいね！なんて、ものすごい力で両肩を叩かれた。

実は試作品を見たまゆさんに、コレはいけるかも！と、改装と同時にお店の中に
コーナーも頂けちゃったのだ。プレッシャーは感じるけど、これは嬉しいよね。
だからそれはもう、張り切って毎日仕事をしていた。
開店準備の時に、横井さんに会ったセルジュさんがあたしの婚約者だと自己紹介した
事も、ついつい忘れちゃうくらいにね。

・・・なんだけど。

キャー！！

あぁ・・またやって来た・・・。

店内の時計をチラリと見る。
午前１１時４５分。
今日も時間ピッタリ。
この時間、店内のお客様の殆どは女性。

お店のカウンターの中から、入り口を見ると、今日もキランキランの笑顔で
セルジュさんがやって来た。

「みはる、ランチを持ってきたよ。休憩に行こう」

一斉に、こちらに冷たい視線が投げかけられる。

・・・開店より、毎日繰り広げられる光景だ。

お客様の数が日に日に増えている今、その冷たく鋭い視線も、日に日に増えている。

一度、「なんで、お店の中では呼び捨てなの？」と聞いた事があるんだけれど、
「普段通りですと、なんだか不自然ではないですか。」と言われた。

このコロコロ態度が変わる方が不自然じゃん！と言ったんだけど、
「ではやはり、私が執事であると言う事を皆さんに公表して・・」

と言うので
結局あたしが折れたワケだ。

こんな貧乏アルバイターに執事って・・・。
大体！執事の方が洗練されたセレブって、アリなのか！？

「まゆさん、みはるに休憩お願いします」

そう言うと、甘ったるい笑顔で振り向き、キャーキャー騒ぐ周りの少女から
淑女までの視線なんて気にならな～いって感じで無視して、あたしの腕を取った。

「さ。行こう」

あたしの肘のところを軽く引いて立ち上がらせ、そのまま手を下にすべらせる。
さりげなく、セルジュさんの手はあたしの手の平に到達した。

きゅっと手を繋ぐと、建物の一角にある休憩室に連れてゆく。
このモールには、各フロアに休憩室もあるけれど、一応地下3階に社食もあるのだ。
それは改装前から一緒だ。
フロアにある休憩室は、基本的にそのフロアのスタッフ限定で、冷蔵庫と数種類の
お茶が用意されている。
お弁当組は、ここで休憩を取る事が出来、持ってきていない人は、地下の社食で
ご飯を食べるのだ。

あたしはいつも社食組だった。
ママは駅前のパン屋さんでパートをしているから朝早くてお弁当は用意できないし、
あたしはお料理苦手だし・・・。
なにより横井さんも社食組で、混み合ってる時なんかは時々だけど同じテーブルに
つく事もあって、楽しみにしていたのに・・・。

なのに、毎日社食なんて勿体無い。それに、栄養が偏る。とセルジュさんが断固反対を
申し出た。
挙句の果てに「私が作ります」とまで言い出して・・・。

こうして、手作り弁当を持ってくるのだ。

なんでも、「作り立てが美味しいですよね」だそうだ。

いや、分かる。お料理は作り立てが美味しい！それは分かる。

そんなセルジュさんは、毎朝あたしをお店まで送ると一旦家に帰ってお弁当を作る。
そして、お昼前にお弁当を持って一緒にランチタイムだ。
一応、休憩室は家族は入ってもＯＫ。という若干ゆるい決まりだったので、セルジュさんも
一緒に食べている。

送り迎えも、あたしの自転車を壊してしまったから。
お弁当は、社食ばかりだと好きな物ばかり食べて栄養が偏るから。
わざわざ持ってくるのは、作り立てが美味しいから。

どれもいちいち正当な理由があって、そう理由を並べられると何も言えなくなってしまう。
一度、それでも反論したんだけど、とっても寂しそうに「お嫌ですか？」と言われてしまい、
結局は白旗を上げてしまったのだ。

そんなこんなで・・・ランチタイムも横井さんと会えない・・・。

横井さんが気になったきっかけは、ウチのお店の飲み会と、横井さんの働く
時計店の飲み会会場が同じ居酒屋になってからだ。
その時、未来へのビジョンをしっかりと持って、しかも周りは酔ってどんどん
醜態を晒す中、かなり飲んでるのに自分を見失わず、周りへの気遣いも出来る
横井さんに惹かれた。
改装前は同じフロアだったから、時々会う事もあって、思いは募っていった。

改装後、フロアが違うからなかなか会えない。更に休憩室もフロアが違うと
偶然一緒になる事も無い。
社食は、今や横井さんと偶然会える唯一の場所なのだ。なのに・・・・。
恨めしげに隣のセルジュさんを見上げるも・・・
「今日はね、オムライスを作りましたよ」と、セルジュさんはまた
甘ったるい笑顔を向けた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

お弁当大作戦は、見事お嬢様と横井の距離を開けたようだ。
将来の王子教育の為、料理や国際免許証の取得などもやっておいて
良かった。
ちなみに、結構な種類のスポーツも教える位には出来る。
仕えるのが、ジュエル王国の王子ではなく、日本の女性になるとは
さすがに
思っていなかったが、それでも身につけた様々な知識と技術は役立
っている。

さて。今日はランチの後、すぐには帰らずにやる事がある。
今日は・・大切な日だ。作戦決行だ。

その前に、お嬢様と楽しいランチタイムだ。
日本では、腹が減っては戦は出来ぬ、と言うのでしょう？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ランチ後、２人分のお弁当箱をバッグに仕舞い込み、２階に向かう。
今日、あの男は早番出勤のはず・・・。

「いらっしゃいませ。あ。」

「先日はどうも」

「どうも・・・」

先日の感触から、横井がお嬢様に対して、恋、とはではいかないが、好意を
持っている事が分かった。
それは大きくなる前に、摘み取っておく必要がある。

「何か、お探しですか?」

表情を窺うと、もっと別の事が聞きたいようだが、今は勤務中。
私は客に当たるため、個人的な話は出来ないのだろう。
ふん、さすが野心があるだけあって、私情は出さないか。
まぁいい。今日は、その方が都合がいい。

「愛用している時計があるんですよ。でも最近調子が悪くてね。でも・・・」

ちらりとショーケースを見る。

「こちらのお店はF社の時計は扱っていないようだね」

F社は、最高級の時計メーカーだ。日本で取り扱い許可を得ている店は少ない。

「申し訳ありません・・・当店では・・」

「銀座に行ったらあるのは知っているんだ。でも近くに取り扱い店

があったら
色々楽だから、聞いてみようと思ったんだけど・・そうか、残念だな」

「申し訳ありません。当社でも、努力をしているのですが・・」

一瞬、悔しそうに口を歪ませる。ふふ。その調子だ。

「そうなんだ。それなら、僕が個人的に親しくしている人を紹介するよ。F社の
日本支社の役員なんだが・・・」

えっ。と驚いた顔をする。まさか私がそんな提案をしてくるとは思わなかったのだろう。

「ほ、本当ですか?」

「ああ。僕自身、近くにF社の取り扱い店舗があったら本当に助かるんだ。
紹介するよ。是非、君の熱意を伝えてやってくれないか。うまくいけば、君の
評価も上がるんじゃないかな」

そう、念願の東京本店勤務になるかもね。
心の中で、そう付け足した。

執事さんの誘惑（後書き）

誘惑相手はそっちかーーい！

執事さんと小旅行（前書き）

厳密に言えば、小旅行計画。

執事さんと小旅行

改装したばかりなのに、また改装。

まゆさんに、モールの管理会社に持っていくように言われた書類を持って
社員用エレベーターで2階にやってきたあたしは、仕事中にも関わらず
ちょっとだけ・・ちょっとだけ。と、遠回りして横井さんの居る時計店前に
やって来た。

売場の一部を囲い込み、中でなにやらゴトンバタンと音がする。
今までそこに並べられていたのだろう、時計たちは、今売場に出ている
ショーケースに窮屈そうに並べられていた。

「あら。日野さんじゃない」

時計店の、女性の店員さんがやって来た。
えっと・・・だ、誰だっけ。

「また改装なんですか？」

こうなったら名前を出さずに会話を続けてみよう。

「そうよー。今度ね、国内でも取り扱い店舗の少ない、高級時計ブ

ランドの時計を
扱えるようになったの！
その為の特別なショーケースをね、用意してるのよ」

彼女はふふふ。と得意げに笑った。

あたしは・・あまり時計に詳しくない。というか、ブランド全般詳しくない。
だからイマイチ、ピンとこなかった。

「はぁ・・特別のショーケース用意するような、すごい時計なんですか？」

「そうよ！他の時計と、桁がひとつ違うわ。」

ええーーー！そ、そんなモノを腕につけて、誰が出歩くというのだ！
想像できない世界だ。

「今、横井くんはその件で研修に行ってるの。」

なんだ・・いないんだ・・。

ちょうど、女性店員さんはお客さんに呼ばれたので、あたしも寄り道を切り上げて
管理会社に向かった。
会えるかも？とちょっと期待してただけに、その後の足取りは重かった。

「まゆさんー、2階の時計店、また改装してました。なんかすごい有名なブランドの

時計を扱うみたい」

「・・・寄り道したの？」

はっ！！！ついついお使い中の寄り道を自ら暴露してしまった！

「え～と・・ちょ、ちょっとだけ」

へへへ。と笑うと、まゆさんは「横井くん、居なかったでしょ」と言った。

「はい・・なんで知ってるんですか？」

「みはるちゃん、連休取りなさい。最近働きすぎだわ。すごく有難いけれど、
頑張りすぎたらパンクしちゃう。在庫結構あるし、たまにはゆっくり休みなさい」

突然、まゆさんから連休を言い渡された。
な、なんで～～？
不思議そうにしていると、１１時４５分の男がキラキラ笑顔でやって来た。
今日は平日なので、周りでキャーキャー騒ぐのは暇を持て余している女子大生と
主婦のみだ。

「あっ、セルジュさん。ちょっと待って！」

売場の整理が途中だったんだ。お昼休みの前に片付けておかなきゃなー。

あたしはセルジュさんをカウンターに残して売場に向かった。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――

「あなたでしょう」

「何がです？」

「横井くんに、時計ブランドを紹介したの」

店長がチラリと私の腕時計に目をやる。

「長年愛用しているブランドですからね。近くにあったら助かるのに。と言ったまでですよ」

そう。それを、「こちらも扱えるよう努力している」と前向きな発言をしたのは

向こうだ。

「横井くん、お手柄だって社長直々にお言葉があったらしいわ。今、そのブランドの方に

研修に行ってるんですって」

「取り扱いが難しい時計ですからね。知識が無い人間には売らせない厳しいブランドです」

「分かってて紹介したくせに」

「横井くん、本店に呼ばれたわよ。そのブランドの責任者ですって。
東京本店に在籍して
各店舗をまわるらしいわ」

「すごい出世ですね。喜ばしいことではないですか」

「みはるちゃんは落ち込むと思うわ」

「・・・・」

「仕掛けたあなたに頼むのはとーーーってもムカつくけれど、仕方ない。
みはるちゃんに連休をあげる事にしたの。リフレッシュ休暇よ。確かに最近
頑張りすぎてたし」

「・・・つまり？」

「この件は横井くんみたいに野心のある子には大きなチャンスだわ。
みはるちゃんの
事は気にかけてると思ったんだけど・・でも今の彼なら容赦なく切り捨てて行くでしょうね。
研修が終わったら簡単な引継ぎをして、すぐに異動みたいだし、少しここから
みはるちゃんを引き離そうと思って」

「なるほど・・・休暇が終わった頃、彼はもう急な異動でここには居ない。と
言う事ですね」

「そうよ。彼はきっと本店に行くと決まったら、みはるちゃんに冷たくすると思うの。
それは・・見てられないから」
「良いでしょう。この話、乗りましょう」
ーー
「急に１週間もお休みって・・何したらいいんだろー？・・・あ。」
「家でアクセサリー作りは、ダメですよ、リフレッシュ休暇になりません」
むーーー。作り貯めておこうと思ったのに・・・。
「お友達に会うとか、どこかに泊りがけで出かけるとか・・色々あるではないですか」
「あ！そうだね！」
親友の香澄と都子には、一緒にパリに行ってから会っていない。
ふたりは東京でＯＬをしてるからなかなか会えないのだ。
ジュエルから帰って来て、なぜかセルジュさんもついて来たと言ったら
会わせろってずーっと言われてるしなぁ・・・。

「セルジュさん！一緒に東京に行きませんか？」

「東京、ですか？」

「だめ、かな？」

「勿論、お供致しますよ」

願っても無い申し出だった。

ただ、横井の居場所を確認して近寄らないようにしなければな・・・。

セルジュさんはキラキラ笑顔の下に、こんな黒い考えを綺麗に隠していたのだった。

勿論、あたしは全然気付く事もなくいそいそと2人に送るメールを作成してたのだった。

執事さんと珍道中（前書き）

珍道中というか・・・・執事さんの暴走とでも言いますか・・

「ママ、連休使って東京に行ってくるね」

「あら。じゃあみさきの所に泊まるの？」

「う・・ん。セルジュさんも一緒だし、そうさせてもらおうかな」

「・・そう」

ママの反応が少し悪い。でもそれはあたしも一緒だ。
家族はおねえちゃんは大好きなんだけど・・・問題はお義兄さん
だ。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――

つ・・・疲れた・・・。

東京まで来るだけでこんなに疲れるとは・・・。

セルジュさんが「私にまかせてください」と言うので、おまかせし
てたあたしが
バカだった・・・。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

新幹線は初グリーン席だった！

それでもまだセルジュさんは「個室が無いなんて・・」と言っていた。

途中の、長めの停車時間のある駅ではなんと、特製駅弁が届いたんだよ！

品の良さそうな着物姿のおばさまが、若いスーツ姿の男性を連れて恭しく

運んできた。

中はおせち料理もビックリのゴージャスさ！

ポットにお茶まで入ってて、それもすごく高級なお茶なのだろう。

いそいそと準備を始めるセルジュさん。

あたしは呆気に取られていた。

「お嬢様との、初めての旅行ですから」

これまた甘ったるい表情ではにかむセルジュさんではあったけども・・・

え？なんか旅行の意味が激しく違うと思うんですけど！

反論しかけて大きく開けた口に、味がしっかり染込んだ一口サイズの煮物を

放り込まれ、余りの美味しさに言葉も吹っ飛んだんだった。

と、とにかく。とにかく！作ってくださった方に申し訳がないもの

ね。
ここは食べる事に集中しよう。うん。

食事も終わり、かなりの量があった特製駅弁はすっかりおなかにおさまった。
そこでまた、お弁当を持ってきてくれた2人が登場！なんと、一緒に乗車していた
みたい。
ささささっと片付けると、一礼して丁度停車した駅に降りてゆく。
入れ替わるようにやってきたのは・・・デザートだ！
ふりふりメイドスタイルの女性と、これぞ執事という感じの格好をした壮年の
男性が。

これまたポットに入ったお紅茶と、そしてフルーツたっぷりのタルトが目の前に
置かれた。
目の前のフルーツタルトは、ナパージュで色とりどりのフルーツがキラキラして
更にあたしを誘惑した。

まぁね！これも・・わざわざ持ってきてくださったお2人に・・・悪いし？
別腹とも言うし？ペロリと食べちゃったけど。
あ～、フルーツタルト美味しかった！！！ほぅ。と満足のため息をつくと・・

「ナパージュが」

「へ？」

「ついてますよ」

セルジュさんの長い指が、すっとあたしに近づき、そのままゆっくりと下唇をなでる。
そして、そのまま手を引き・・ペロリ。とその指をゆっくり舐めてからそのまま
口に含んだ。
その間、目はずっと・・ずっとあたしを見つめていた。
その眼差しは、唇についてたナパージュよりも、更に甘かった・・・。

そのままどれ位見詰め合ってたか分からない。
とは言っても、あたしは見蕩れてたとかじゃなく！断じてそうじゃなくて！
何をしてるんだ、このヒトは！と、口をあんぐりしてしまったのだ。

傍でコホン。と咳払いが聞こえ、はっと我に帰ると、タルトを持ってきてくれた
執事風の男性が・・。
「お邪魔しまして申し訳ございません。そろそろ東京に到着致します。
ではこちら片付けさせて頂きますので・・」

はっ！！！ここは新幹線！
こんな場所であたしってばなんて事をーーー！！！
見渡すと、視界に入った人が、さっと数人こちらから目を逸らした。

ただでさえ、金髪碧眼の長身美青年と一緒なのに、途中途中で特製弁当は
来るわ、特製デザートは来るわ、めっちゃ目立ってたに違いないのに！！！
そんな中、あんな・・あんなバカップルみたいな事まで・・・・。
カーーーッと、顔に熱が集中するのが分かった。

セルジュさんは平然と、「あぁ、岡田さん、帰りもよろしく」なんて言っていた。
帰りも！？
帰りもあるの！？！？
断りたい気持ちでイッパイだったけど、これ以上人目を集めたくないので、
じっと、じっと耐えていた。

東京駅に到着するなり、誰よりも早く席を立ちたかったけど、通路方にセルジュさんが
座っていたので、出るに出れず・・・・。
通路を通る沢山の人に覗きこまれたし・・・。本当、疲れた・・・。

「セルジュさんだって、そんな事しなくていいのに」

「え？何がです？」

急がないのですから、最後でもいいではないですか。と、駅に着いたにも関わらず
いまだゆったりと腰掛けているセルジュさんがこちらに顔を向ける。
その余裕っぷりに、益々一言物申したい気持ちが募る。

「セルジュさんが指でぬぐわなくても、言ってくれたら自分で取ったよ！
だってそしたらさ、セルジュさんの指だって汚れなかったわけだし・・」

すると、綺麗なセルジュさんの顔に、ふっ。と艶やかな微笑みが乗っかった。
そして、ナイショ話をするかのように、そっと顔を寄せ、耳元に囁く。

「本当はね、指を汚さずに取るつもりでしたよ」

「え？なら、なんで・・」

一層、密やかな囁き声が低く、艶を帯びた。

「私の舌で、舐め取って差し上げたかったのです。ですが、ここは人目がありますからね」

「もしかして・・」と、セルジュさんが更に近づく。
セルジュさんの息遣いが、髪を震わす位に。そして囁きは更に小さく秘められたものになった。
「そちらの方が、ご希望でしたか？」と、とんでもない事を言うと、なんと・・・
あたしの耳たぶをペロリ。と舐めた。

だから！！！ただでさえ人目引いてますからーーーーー！！！！！
それに、耳にはナパージュついてないもん！！！！

この旅行、先が思いやられるんですけど・・・。

目的地に着くまでの移動時間だけで、あたしはもう疲れ果てていた。

執事さんと珍道中（後書き）

セルジュ、壊れました。
頭の中はお花畑ですかねー。そんな感じ。
きっと見るものすべてバラ色状態です。

執事さん江戸を行く（前書き）

ちょ～～っとだけ、ここから数話しんみりします。

執事さん江戸を行く

ガラガラガラガラ・・・
どこからともなく、鼻歌が聞こえてくるような気がする・・。
ちらりと左上に視線を上げると、満面の笑みの執事さんと目が合った。

すぐ隣を歩いているのに、確実にふたりの間に温度差を感じるんですが！

「あの。ごめんね荷物持ってもらっちゃって」

そう、さっきからガラガラ聞こえているのは、ふたりの1週間分の荷物が詰め込まれたスーツケースの音だ。

「いいえ。これ位なんでもありませんよ。でも残念ですね。お姉さまのお宅には
3泊しか出来ないなんて」

そう。本当は1週間お姉ちゃんの家に泊まらせてもらおうと思っていたから、最初
荷物は送る予定にしていたんだ。

「うん・・・仕方ないよ。お義兄さんはお仕事が忙しい人だから」

義兄の事を思い出して、ちょっと眉を顰めて身体を少し引いた瞬間。
セルジュさんが空いた右手で、隣を歩くあたしの右肩を抱えるよう

に引き寄せた。

「え!?何??」

突然のことにバクバクと力強く打ち始める心臓。

自分の右半身であたしに覆いかぶさるようにするセルジュさん。でも歩みを止めないので、あたしはついて行くのに必死だった。

「ね、ねぇ!歩きにくいんですけど!どうしたの?」

「さっき、ぶつかりそうでしたよ。東京は人が多いんですから。気をつけないと」

あ。そっか。地元感覚でのんびり歩いてた。

いや、それにしてもくっつきすぎ!くっつきすぎですから!

べしべしと肩にがっしりとかかっているセルジュさんの右手を叩いてみても、

びくともしないし!

すると、周りがザワザワ騒がしくなった。

「何?なんかの撮影?」

「え?誰?芸能人じゃないの?」

うぅ・・・なんで芸能人とかモデルとかゴージャス美形がいっぱいいるはずの

東京でも目立つんだよーーー!

思わず身体をきゅっと縮こまらせる。
と、何を勘違いしたのかセルジュさんもふっと顔を下げ
「私が守って差し上げますから」
と、甘く囁いた。

ちがーーーう！あたし1人だったら注目を集めることなく、悠々と移動出来てるから！
原因はセルジュさんだからーーー！

「お嬢様、この辺ではないですか？」

一瞬身体が自由になって、周りを見渡す。

「あ、うん。ちょっと待ってね。えっと、次の路地を右に入るの」

「では参りましょう」

また右手をこちらに差し出した。

えっ！またあの密着ですか！確かに週末のこのお洒落な街は人で混むけど・・！
それは勘弁！と、とっさにこちらに伸ばされたセルジュさんの手を掴んだら・・・

「嬉しいですね。お嬢様の方から手を繋いでくださるなんて・・」
輝くような笑顔を向けられた。

へ？ち、違うでしょ！手を繋ぐって、こんなワシッと掴まないでしょう！

でも相変わらず鼻歌歌いそうな上機嫌のセルジュさんは、右手にあたし。左手にスーツケースで
軽やかに路地に入った。

先ほどまでの大通りの騒ぎはどこへやら。一気に静寂に包まれる。
路地を入ったそこからは、オフィスや高級マンションが並ぶ。ここから奥は、オフィス関係者や
マンションの住人しか通らない為、一気に人通りが少なくなるのだ。

「もう少し奥ですか？」

「うん。そうなんだけど・・待って。お姉ちゃんの家に行く前に話があるの」

「？何でしょう？」

セルジュさんは不思議そうに首を傾げると、そっとあたしの手を離して正面に立った。

本当は新幹線の中で話そうと思ってたんだ。でも、お弁当やらデザートのバタバタで
気がついたら到着してて、それどころじゃなかった。

でも行く前に話さなきゃ。

「あのね、お姉ちゃんやお義兄さんが何を言っても、何も反応しないで欲しいの」

「・・それはどういう事です？」

「あたし、お義兄さんに嫌われてるから・・。でもお義兄さんは忙しいから
あまり会わないと思うから、きっと何もないと思うけど・・」

セルジュさんはなんだか納得がいかないようだったけれども、それでもしぶしぶ
「・・わかりました。お嬢様がそうおっしゃるなら・・」
と言ってくれた。
それを見て、あたしは「よし！行くぞ！」と気合を入れて歩き出した。

そして少し坂になっている小道を登りきった場所に立つ、街並みに負けないお洒落な
ビルの前に立ち止まった。

「こちらですか？」

あたしの緊張が伝染したのか、セルジュさんの声色も少し硬い。

「うん」

「では、参りましょう」

先を行こうとするセルジュさんを慌てて制止する。

「そっちじゃないよ！あたし達は裏口から！」

だってあたしは、お義兄さんに正面からの出入りを禁止されていたから。

執事さんの腕の中（前書き）

まだ若干シリアス気味。

執事さんの腕の中

大きなビルを一旦通り過ぎると、あたしはセルジュさんからスーツケースを
受け取り、ビルの右手にある小道を歩き出した。

「ここね、石畳になってるからスーツケース転がすの、ちょっとコツがいるんだ」

軽い口調で話してみるけれども、実はちょっと緊張している。

小さな頃から、お姉ちゃんとはずっと仲良しだった。
そう、お姉ちゃんがお義兄さんと出会って結婚するまでは・・・。

今もお義兄さんに気を使いながらもあたしの事は気にかけてくれている。
あたしもやっぱり会いたいし、東京に来たらやっぱりまずここに宿泊の希望を言うのだ。
今回は、前半の3泊が「許可」された。

ビルの裏側に回ると、正面入り口よりも二周りほど小さな勝手口が見えた。
その横の、小さなインターフォンを押す。

「ここはね、お義兄さんの持ちビルなの。モデル事務所の社長さんなんだよ。
すごいでしょう?5階から上が居住空間になってるの」

「はい。木嶋でございます」

「こんにちは。日野です。今日から3日お世話になります」

「・・・はい」

冷たい声が対応した。

目の前のドアから、カチャリと音がした。

音がしただけ。開いてはいない。つまり、カギは開けたからドアはオマエが開けろ。って事だ。

「失礼しますー」

先にスーツケースをゴロリと中に入れて、それから顔を覗かせると目の前に濡らしたタオルを突き出された。

タオルを手にしているのは、淡いピンクのスーツをビシッと着て隙の無いお化粧を綺麗に施している女性・・・。

「ありがとうございます」

お礼を言ってタオルを受け取る。

「室内に上がりこむ前に、スーツケースの汚れた部分を綺麗に拭いてください。

それから、室内ではスーツケースは転がさないで。今回は2部屋と聞いています。

7階の客間を使ってください。簡易キッチンもそのまま使って。冷蔵庫にはミネラルウォーターを数本入れておきました。他になにか？」

「イエ・・・」

そう言うと、女性はそのまま部屋の奥へと消えた・・・。

まだ体の半分が屋外に出た状態で、とりあえずスーツケースを拭きにかかった。
すると・・・

「私が」

まだドアの外にいたセルジュさんが、ドアを大きく開けるとスーツケースを奪い取って拭き出した。

「お嬢様。私は・・我慢できそうにもありませんが・・」

「・・・それでも、我慢してください」

「・・・・・」

2人分の荷物が詰まったスーツケースは、転がさずに持とうとすると結構重い。
それが分かってて、彼女は「転がすな」と言ったのだ。
ちなみに、先ほどの秘書風な装いの女性は・・・通いのお手伝いの高橋さんだ。

勝手口の玄関を入ってすぐ横に、居住スペースに直行するエレベーターがあるのでそれに乗り込み、7階へと向かった。

7階へ着くと・・・

「みはる！いらっしゃい！」

ブランド物のワンピースを着て綺麗にお化粧したお姉ちゃんに迎えられた。

「お姉ちゃん、久しぶり！」

「ごめんね。迎えに行けなくて・・あの・・」

口篭るお姉ちゃんに、そっと首を振る。

「お義兄さんに、悪いもの。いいよ。今日はセルジュさんも居たし、荷物は持ってもらったの」

「はじめまして。セルジュ・ロマーニです。今日野家でお世話になっております」

「はじめまして！みはるの姉のみさきです。あらー、写メで見るよりカッコイイわー！」

写、写メ！？

「ママが送ってくれたのよ」

「セルジュさん、知ってた?」

「先日、写真を撮らせてくれと言われましたが・・」

ママってば・・なんてすばやいんだ!

「それにしてもみはる・・こっちに来るならその格好を・・」

「お姉ちゃん、すぐに出かけるから、部屋で荷物解くね」

お姉ちゃんの言葉を途中で遮る。勿論、これはわざとだ。
お姉ちゃんもそれを知ってるから、そっとため息をついてその話は終わりにしてくれた。

「わかったわ。今回は前半しか泊められなくてごめんね。このフロアは好きに使ってくれていいから」

「・・ありがと」

そう言うと、お姉ちゃんはエレベーターで階下に降りて行く。

「・・・このフロア以外は出入り禁止。と言っているようなお言葉でしたね」

お姉ちゃんとの会話を、静かに聞いてたセルジュさんがあたしの正面にやって来て
そっとあたしの手を大きな手で包み込んだ。いつの間にか、手をぎゅうっと握り締めてたみたい。

「そんなに力を入れては、ご自分でご自分を傷つけてしまいます・・」

そっと、そっと手の平に食い込む程に力んだ指を、ひとつひとつ優しくほどいてくれた。

「話してくださいませんか?お義兄さんとの事を・・」

ふと視線を上げると、セルジュさんは目の前に跪き、優しくあたしの手をマッサージしていた。

「・・・お姉ちゃん、綺麗だったでしょう?自慢のお姉ちゃんなの。でもお義兄さんと出会ってから、なんか変わっちゃったなー・・。お義兄さんはね、このビルを所有してて、階下にあるモデル事務所の社長さんなの。偶然出会ったお姉ちゃんの綺麗さに惹かれて、スカウトしたんだけどね、結局お姉ちゃんはモデルじゃなくって、お義兄さんと結婚して、社長夫人になったんだ。お義兄さんはね・・・美しくて洗練されてて、高価で上品なものが好きなの。それが、イコール人の価値だと思ってるのよ。だからお姉ちゃんの服とか持ち物、好み、全部口を出した。お姉ちゃんも感化されてった。そして、あまり田舎の実家には帰って来なくなったんだ。お義兄さんも、必要最小限しかうちの家族とは会わないわ。彼の好みからかけ離れた家族だから。お義兄さんの長期出張なんかで、お姉ちゃんが子供を連れて時々遊

びに来るくらいよ。
お義兄さんは田舎くさくてブランドで固めてないあたしが、自分の聖域に足を踏み入れるのが嫌いなの。
その考えは、他のお手伝いさんとか、モデル事務所のスタッフさんも知ってるから
皆あたしの相手をしないってワケ。
更に・・甥っ子はね、悠馬(ゆうま)って言うんだけど、うちの家族に懐いててね～～。
こっちでは泥んこになるまで外で遊ぶとか、とんでもない！って感じらしいの。
だからうちに来てる時は、時々パパとキャッチボールとかしてるらしいんだけど
それもあってお姉ちゃん以外のうちの家族はとーーーーっても嫌われてるの」

一気に離すと、ふーーーーっと長く息を吐いた。

「なぜ・・わざわざこちらにいらしたんです？」

あたしの顔を見上げ、そっと頬を撫でてくるセルジュさん。
下から見上げてくるから、いくら俯いても、彼の視線から逃れる事は出来なかった。

「だって・・やっぱりお姉ちゃんは家族だし、好きなんだもん・・」

「そうですか・・そうですね。家族ですから」

そっと、立ち上がるとセルジュさんは柔らかくあたしを包み込み、
子供にするように

ポンポン。と背中を優しく叩いた。
いつもなら抵抗するあたしも、あまりに自然に抱きしめられて、あまりにもそれは
優しくて、ここに甘えてもいいんだって自然と思えたんだ。

一度、セルジュさんの胸にぎゅーっとしがみついた後、あたしはそのまま顔を上げた。
悔しい事に身長差がありすぎて、真上を向かないとセルジュさんの顔が見えない。
どうしても顔を見て、聞きたかったんだ。

「顔の美しさとか、服の高価さとか、そんなに大切かなぁ？そんなのにしか、
人の価値って無いの？」

「いいえ。違いますよ。あなたが私にそれを教えてくれたんじゃないですか」

優しく微笑むセルジュさんが、目の前に居た。

「私は、あなただから一緒に居たいと・・別の世界を見たいと思ったのですよ」

窓から差し込む日差しは、ふんわり微笑むセルジュさんの美しい金髪を、更にきらめかせて
一瞬その眩しさに、目を、閉じた。

その一瞬の時だった。

唇に、柔らかく熱を持ったものが押し付けられた感触があったのは・

・・・。

でもその時のあたしには、それすらもあまりに自然で・・・
それが何だったのか・・はっきりと意識してしまう前に、またあたしはセルジュさんの
柔らかな抱擁の中に居た。

執事さんの腕の中（後書き）

セルジュ、どさくさにまぎれて・・・・！

ふんわりと柔らかく抱きしめられ、なだめるように肩を後ろから丸く撫でられると、
高ぶっていた感情も段々と落ち着いてきた。

そうすると、さっき一瞬唇に触れたモノに意識が行って。

あれは・・もしかして・・ど、どうしよう!?!?

それにこの状況!!!

こないだのお姫様抱っこなんか、まだカワイイって位の密着振りですが!

さっきのはもしかして。どうしよう。いや、まさか!

そんな感情がぐるぐると頭の中を駆け巡る。

救いの手は突然差し伸べられた。

静かだった室内に、突然明るいメロディーが流れた。

「け、携帯!!!」

不自然な程に大きな声を出すと、柔らかく温かい、心地よかった腕の中からの
脱出した。

ん？心地良かった？

ブルブル。大きく頭を振って、今の言葉を外に追いやる。心地良かったなんて・・。違うもん。

連絡は都子からで、１０分位遅れそうという内容だった。

「あ！いけない！待ち合わせ！」

「お嬢様、お着替えはいかがなさいます？」

「う、ううん。このままで・・行こうかと」

「でしたら、とりあえず荷物は寝室に持って行きますね」

柔らかな笑顔で、よどみなく話すセルジュさんの様子はあまりにも普段通りで。

やっぱりさっきのは気のせいだったんだ。と思えた。

でも、まだ自分じゃない熱が唇に残っているようで。そっと唇に指を当てたけれど

勿論答えなんて見つからなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「きゃー！みはる、久しぶり！」

「香澄、都子〜〜〜！」

2人に抱きつき、あたしは久しぶりの再会を喜んだ。

「2人とも仕事帰りにごめんね～～！」

「いいよー。大丈夫。それより・・さ。」

都子がチラリと視線をあたしの頭上に飛ばす。あ。早速ですか。

「セルジュ・ロマーニです。今はみはるさんのお家でお世話になっております」

「キャーーー！」

待ち合わせにしていたのは、この辺では待ち合わせ場所として有名だという、
あるオブジェの前。
同じように待ち合わせの人でごった返してる中でも、きっと一番目立っている人・・
セルジュさんが話すと、都子や香澄だけじゃなく、周りで様子を窺ってた女性までが
歓声を上げた。

「すごい！想像以上にカッコイイ！」

普段クールな香澄までが、はしゃいだ声をあげた。

ちょ、ちょっと騒ぎが大きくなっている気がするんですけど！
彼氏を放り出してこちらを向いてる子だっているし、なんか・・・
なんかこの空気

怖いんですけどーー！
あわあわして周りを見渡すと、

「お話は座ってからに致しましょう」

セルジュさんが微笑んでまたひとしきり歓声があがると、彼は都子と香澄の背にそっと
手を添え、
移動を促した。それを見てちょっとだけ、胸になんだかモヤモヤしたものが出来た気がした。
そして3人はそのまま歩き出す。
あたしは・・・モヤモヤに気を取られて、歩き出すのが遅くなってしまい後ろから
ついて行く形になった。
時々人に押されて、人ごみに慣れていないあたしは3人との間に距離が出来る事があって、
その都度小走りで追いかけた。
東京に到着した時はセルジュさんが上手に手を引き、人ごみに巻き込まれないように
うまく誘導してくれてたんだ・・・。
香澄が予約していたという、隠れ家風洋風居酒屋（どんだけ「風」がつくんだーい！）までの
移動の間、そのセルジュさんが振り向く事は無くて・・・。モヤモヤは大きくなった。

食事の間も、専ら3人で会話は進んでいく。
セルジュさんは聞き上手でもあって、2人の会話を上手に盛り上げていた。
香澄も都子も、今回の一番の目的はセルジュさんだったから、話の矛先は自然と

セルジュさんに向く。
際どい質問もあったみたいだけど、セルジュさんはそれも上手にかわしてるようだった。
本当のところ、あたしは皆の会話が耳に入ってこなくてあんまりよく覚えていない。
時々へらっと笑って見せてあとは食事してたんだけど・・・あんまり味も感じなかった。
やっぱりモヤモヤは増えた。

都子がお手洗いに立った時、戻って来た都子を立ち上がって迎え、椅子を引いてあげた
セルジュさん。
モヤモヤは、もう胸いっぱいに広がって喉にまで苦味を感じていた。

思えば、セルジュさんがウチに来てからというもの、ママやまゆさん以外に
セルジュさんが女性と親しげに接しているのを見た事が無かった。
これが本来のセルジュさんなのかな。だとしたら、あたしは全然、彼の特別じゃない。
セルジュさんは誰にでも優しいんだ・・・。

それに気付くと、食欲までも無くなっていた。

フェミニストな執事さん（後書き）

あれれ？どうした、セルジュ！

執事さん、スカウトされる

「行ってらっしゃいませ・・・」

執事たるもの、主には常に笑顔であれ。

と、みはるお嬢様の執事になる事になってから通った執事学校での言葉だったか・・。

今の私には到底無理な話だ。

今、超仏頂面でお嬢様を送り出したばかりなのだ。

「今日はセルジュさんは来なくて良いから！」

と、お嬢様にきっぱりと拒絶されてしまった・・・・。

膝から力がすーーっと抜けていくようだった。しっかり立てていたのが不思議な

位の、脱力感だった。

「あの。でもですね、お荷物持ったり・・」

「ううん、いらない！今日は3人で遊ぶの！セルジュさんが居たら、ガールズトークが出来ない！」

とにかく待ち合わせ場所まではご一緒致します！と、ゴリ押しして、渋るお嬢様を

半ば抱えるようにしてついて行ったのだけれど・・・

待ち合わせはお義兄さんのビルの隣のカフェだった。

既に都子さんも香澄さんもいらっしゃっていて、お2人に無言の微笑みで訴えかけた。

お嬢様を手に入れるには、親友のこのお2人には認めてもらわないと・・と思い、

昨日はしっかり気合を入れてエスコートしたのだ。

だからきっと今日だって同席を認めてくださるはず・・・と思い、

一歩前に進むと・・・

「じゃあね、セルジュさん!」

「今日は3人だけで出かけるから。みはるはちゃんとお返ししますからご心配なく」

お嬢様の両脇をガッチリ固め、さっさと奪い取ってしまった。

そんな時に、笑顔でいられるはずなどなく、最初のセリフになるわけだ・・・。

ガールズトークに負けてしまった・・・。

「はぁ・・・今日はひとりで時間を潰すか・・」

相変わらず両脇を2人にガッチリ固められたまま、段々遠ざかっていくお嬢様の

背中を見つめながら

そっとため息をつきた。

「さて。何をしよう」

ふむ。とカフェ前で考えていると、何やら人目を集めてしまった。
いけないいけない。
微笑みを浮かべ一瞥すると、近寄ろうとしていた一部の人もはっと
足を止めた。

一人で出歩くと色々と厄介かな・・・。
とりあえず、大使館に連絡し、車と人を一人手配する事にした。

しばらくすると、指定したカフェの前に1台の車が到着した。
中から若い、栗色の髪の男が慌てたように出てくる。
カフェの入り口から私を見つけると、その口が「王子」と紡ぐ前に、
私は自らの口に指を当てて黙るように示した。
男ははっと口を噤むと、無言ですばやくそばにやって来た。
「お、王子。お初にお目にかかります。ヴィレッドと申します」
そばに来て、ようやく声を潜めて話し出すその男の名前に聞き覚え
があった。

「今春から赴任している外交官捕かい？」

ジュエル王国は、小国ながら日本との関わりが強い為、大使館もそ
こそこの大国規模の
人数が派遣されていた。彼は確か、日本に来たばかりの外交官捕だ
ったと記憶している、
すると、ヴィレッドがその明るいブラウンの目を輝かせた。
どうやら当たっていたらしい。

「申し訳ないが、今日1日の予定が空いてしまってね。ちょっと付き合ってくれないか」

「勿論でございます！どちらに参りましょう？」

「そうだな・・まず車に行こうか」

またもや人目を集めてしまっているようだった。
ヴィレッドも、ジュエル王国出身。なかなかの良い男だったしね。

「まず・・・我が国の宝石で作ったアクセサリーを扱っている店を見ようかな。
銀座にお願いできるかい？」

「抜き打ちでの視察ですか？」

「うーん。まあね」

頭の中にはちょっとした計画があった。私はそれを思い出して、クスクスと笑った。
バックミラーでそれを見たヴィレッドが、不思議そうな顔をしていた。

結局、午前中いっぱいをジュエル王国関連の企業や店舗を回るのに費やしてしまった。

「午後は少し買い物がしたいな。数店回りたい店があるんだが、どれも近いから

徒歩で行くよ。
3時間ほどしたらまた車を回してくれないか」

「畏まりました。それでは一旦大使館に戻りますので」

うむ。と頷くと、贔屓にしているブランドのショップに足を踏み入れた。

が、すぐにひとりになった事を後悔した。

「俳優に興味はありませんか？」

「どこ出身？お洒落だね～。モデルに興味ない？」

丁寧な口調の紳士から、お洒落を履き違えているようなチャラチャラした男まで、
ひっきりなしに声をかけられ、集中して買い物も出来やしない！

ヴィレッドが居たら、追い払ってもらえただろうが、自分で追い払いつつ買い物を
しなければいけないので、
なかなか買い物が進まない。

何人かを追い払った時、異臭がした。

あまりの衝撃的な匂いに振り返ると、営業スマイルを貼り付けた小柄な男が
近づいてくる。
これは・・香水の香りか！？どう使ったらこんな刺激的で殺人的な匂いになるんだ！？

「ボク、モデル事務所を経営してる者なんだけど、君、すっごく良いね！遠目でもすっごく目立ってたよ！きっと、すっごく良いモデルになると思うんだよね。君のような人に出会えて、ボクもすっごくラッキーだなぁ！」

すっごくすっごくを連発して、男は近づいてくる。私としては、すっごく近寄らないで欲しいものだが！

早く立ち去って欲しい一心で、差し出された名刺を受け取ってしまった。

「あ。受け取ってくれるんだ？君、さっき何人かのスカウトに声かけられるの見てたけど、全然受け取らなかったよねぇ？」

断言しよう。男が語尾を延ばすのは、気持ち悪い以外の何物でもない！！

「ボクのとこさぁ～。すっごく有名なモデルがすっごく沢山いるんだよぉ～。ね、ボクの事務所知らない？」

知るか！早く離れてくれ！と、思ったが・・・知っていた。

いや、厳密に言えば、モデル事務所を知っていたのではない。モデル事務所の、住所を知っていたのだ。

それは、今滞在しているお嬢様のお姉さまのお宅だったのだから。

執事さん、スカウトされる（後書き）

王国なので、ジュエルにも執事学校があるって設定。
にしても・・・義兄うざいですね・・・。

「お嬢様、準備はよろしいですか？」

「うん。だいじょーぶ！」

「では、参りますか」

「うん。じゃあ、お姉ちゃん。ありがとう。また来るね」

「ほんと、御免ね。週末まではどうするの？」

聞かないで。それ、ちょっと怖いんだから。

「お嬢様？参りましょう」

後ろからセルジュさんに声をかけられ、あたしははっと我にかえった。

大丈夫・・きっと、大丈夫だと思う。

「えっとね、後の日程はホテルに泊まるの。まさかセルジュさんと一緒に都子のマンションにお世話になるわけにもいかないし・・・」

香澄は最近彼氏と同棲始めたばかりだしね。と続けて言うと、お姉ちゃんの表情がちょっと曇った。

「えっ。そうなの?言ってくれれば、辰彦さんに相談したのに・・」

え。無理でしょう、お姉ちゃん。
お姉ちゃんとこに滞在中、お姉ちゃんは毎晩7階までやって来て、
久しぶりの姉妹トークも
楽しめたけど、やっぱりお義兄さんの帰りとかを気にしてるみたい
だった。

「あっとー。気持ちだけで嬉しいから。じゃあ、また来るね」

お姉ちゃんがお義兄さんに何か意見を言うなんて、考えられない。
今回はお義兄さんと会わずに済んだだけ、マシかな。
ほぅ。と息をつくとセルジュさんが不思議そうにあたしを見た。

「どうか、なさいましたか?」

「んーーー。セルジュさんにお義兄さんを紹介したかったような、
会わずに
ほっとしたような?」

その時、セルジュさんは顔をしかめて高く鼻筋の通った美しい鼻に
手を当てた。
その仕草は、あたしがお義兄さんに会った後にしてしまう仕草だっ
たから、
なんだか可笑しくて声をあげて笑った。
だって、まさかセルジュさんがお義兄さんを知ってるなんて、あり
得ないもん。

それよりも、心配事があるんだ。
だからあたしの意識はすぐにお義兄さんの話題からそれた。

「さて。ではお嬢様、ホテルに参りましょう」
きらんきらんの笑顔が向けられる。
「さ、タクシーへ」
手際良く止められたタクシーに荷物を預け、きらんきらん笑顔を向けたまま、
セルジュさんはあたしの背をそっと押し、乗るように促した。
「あのね、セルジュさん！」
な、なんでピッタリとくっついているのかな？
なんでなんで、手を握るのかな？
「初めてですね」
うっとりと、囁くように話すセルジュさんの目が、なんだかいつもより艶っぽく
見えるのは、気のせい・・・だよね！？
「ななななな、何が！？」
最初、握るだけだった手。それがいつの間にかセルジュさんの腕はあたしの腕の下を
通り、腕を組むような体勢になった。
そのまま下から指を絡めて、あたしの手全体を包み込む。
その手にきゅっと力を入れられた時。その手の動きに、すっかり手に意識が行っていた

無防備なあたしの耳に甘い吐息がかけられた。

「へっ？」

驚きにぴくりと肩を揺らして、顔をセルジュさんに向けると、目の前にセルジュさんのきらきらした明るい青の瞳があった。

身体が、金縛りにあったように動けない。

目が、催眠術にかかったように青い瞳から逸らせない。

じっと見つめるその先で、セルジュさんの瞳が笑みを浮かべ弧を描いた。

「ふたりきりの夜は、初めてですね」

・・・・・・・・・・どどどどうしよう！何かしろ、私！

頭は警告するんだけど、身体が動かなきゃどうしようもない！！

ごぶん！！

突然変な音がして、ふっと身体を固めていた緊張が緩んだ。

ううん。あたしの身体を絡めていたセルジュさんの視線が外されたのだ。

「し、失礼致しました」

セルジュさんの視線を追うと、顔を真っ赤にしたタクシーの運転手さんが・・・。
どうやらセルジュさんの甘ったるさに、咳き込んでしまったようだった。

のぉーーーー!!!!
あたしは余りの恥ずかしさに、手にしっかり絡められていたセルジュさんの手を
思いっきり振りほどいた。

「ふ、ふたりっきりって言っても、部屋は別々だよ!・・・・別々、だよね?」

そうだ。この旅はなんせ、セルジュプロデュースなのだ。
新幹線移動の、特製お弁当やデザートデリバリーを思い出す。あれも周囲の視線が
痛かった・・・。

「あ!!も、もしかして、ホテルって帝国ホテルとか、オークラとか・・・なんか
そーゆー大きなとこじゃないよね??」

「はい。大丈夫ですよ。お嬢様のお気持ちは分かっておりますので、もっとこじんまりした
ホテルです」

えへん。という感じに胸をそらすセルジュさん(手を振り払ってから少し離れるように
お願いした)だけど・・・いや。新幹線グリーン席を取る時点であ

たしの事、
分かってないんだけど・・。

でもホテルはどうやら安心みたい。
運転手さんにも「銀座」って言ってたし、確か帝国ホテルは銀座じゃないもんね。

到着したホテルは、大きいってわけではないけれど、とっても素敵な洋館で、
確かに恐る恐る想像していた、とにかく大きくて敷居が高そうな建物！！ではなかった。
でも高そうだな・・・。すぐにドアマンに荷物を取られ、その優雅な仕草に少しだけ不安になる。
しかも、セルジュさんがドアマンの男性に何か話すと、男性は素早い動きでベルボーイの
男性に荷物を渡し、そっと何かを伝える。そしてベルボーイの男性にはフロントと
思われる場所と反対側に案内し出した。

「え？こっちじゃないの？」

「ええ。こちらだそうですよ」

？？？あっちにカウンターがあるけど、そこじゃないんだ？？なんか不思議なホテルだな・・。
案内されたのは重厚なドアがある個室で、中を覗き込むとドアの重厚さに負けない
どっしりして皮が飴色に輝く高価そうな応接セットが部屋の中央にどでん。と置かれていた。
な、なんだ？この部屋は・・・。不安になっていると、ジャケット

のポケットが震えた。

「あ。電話・・セルジュさん、ちょっと出てくるね」

電話に出ながらそっと後ろを窺うと、セルジュさんはさっきの応接室（みたいな部屋）に入っていくところだった。

？やっぱりそこがフロントなの？？

「もしもし～？ママ？どうしたの？」

「あっ、良かったぁ～！こっちに戻ってくる時にね、芋ようかん買ってきて頂戴ね！」

「えぇっ？帰るの、３日後だよ？」

「でも思い出した時に言っておかないと忘れちゃうから！じゃ、頼んだわよ？」

「はぁーい。じゃあね」

「どうかされましたか？」

いつの間にか、チェックインを済ませたのかセルジュさんが後ろに立っていた。

「ママにお土産を頼まれちゃった」

「それは・・気が早いですね」

「言うの忘れちゃうからって、思い出してすぐかけてきたみたい」

「ではお部屋に参りましょう」

「うん」

「うん」とは言ったけど。とは言ったけどね。

やっぱりここ、ものすごく高いんじゃ？と不安は募るばかりだった。
だって、ホテルは隅々までピカピカに磨かれていて。廊下の赤い絨毯もふかふかだ。
染みひとつない。土足なのに！！
そして、案内された部屋は角部屋だった。

「どうぞ。こちらです」

ベルボーイがドアを開けた、その部屋は・・・・

「な、なななな！！！」

あんぐり口を開けて部屋を見渡すあたしをよそに、セルジュさんはテキパキと荷物の
指示を出している。
頭の中ではそうだ、セルジュさんの分と荷物を分けなくちゃセルジュさんが
自分の部屋に行けない。と思うんだけど、この部屋に、あるはずの物が無くって

それどころじゃなかった。
今あたしが居る部屋は、広い、広い部屋で暖炉とデスク、そしてゆったり座れそうなソファ。
大きな大きな薄型テレビ。そしてどっしりとした重厚なテーブルには瑞々しいウェルカムフルーツ・・。だ。

「せ、セルジュさん？」

「はい？」

「この部屋、ベッドが無いですよ？」

「あぁ。ベッドならそちらのお部屋に・・」

「え？こっちはバスルームじゃないの！？」

「バスルームはこちらですよ」

「え！！！部屋が２つもあるの！？」

「いえ・・３部屋ですが・・」

「そ、そんなに！？ダメだよ！１部屋で良いのに！！」

もーー！なんて贅沢をしてるんだろ！この（元）王子はーー！

睨んだ。あたしは確かにセルジュさんを睨んだはずだ。
なのに、目の前のきらきら王子はなぜにこんなに甘ったるい笑顔と、そして艶っぽい

フェロモンをだだ漏れにさせてるわけ!?

「では1部屋に変えましょうか?さすがにまだ早いと思ったのですが、お嬢様がそんなに積極的だとは・・嬉しい誤算ですね」

は?積極的?

笑顔なのに目が笑ってないセルジュさんがじりじりと距離を詰めてきた。

「えっと、と、とりあえずセルジュさんも自分の部屋に行ったら・・どうかな?」

詰められた距離を取り戻すべく、あたしもじりじりと後ずさりながら話すと・・・

「ありませんよ?今お嬢様ご自身が1部屋で良いと言ったではありませんか」

「へ?」

すみません。話が見えませんが!!つか、話がかみ合ってないと思いますが!

窓辺に追い込まれたあたしは、それでも距離を取ろうとセルジュさんの胸に手をついて押し戻そうとした。

すると、セルジュさんはその腕を取って持ち上げ、あろうことか手首にちゅっとキスを落とした。

「部屋は別々、でしょう?タクシーでそう言ってたよね!?」

「別々、の予定でしたよ。あなたが1部屋で。と言うまでは」

益々ワケがわかんない!

「この部屋は2ベッドルームスイートです。ベッドルームが2つあるのですよ。
でもお嬢様が1部屋が良いと仰るのでしたら、是非とも変更を・・・」

「こっ!このままが良い!前言撤回!わー!2つもベッドルームがあるお部屋なんて
素敵だなーーー!」

一息で言ったあたしを、セルジュさんはからかうように見下ろした。

「1ベッドルームは、次の機会に致しましょう」

ち、違うーーーーーーーーーー!!!!!

その日、彼は上機嫌だった。

ふんふんふ〜〜〜ん♪

こんなに盛大に鼻歌を歌ってる人を見るのは初めてだった。

「せ、セルジュさん？」

「はい？」

軽やかな鼻歌が止み、華やかな笑顔で体ごと振り返り目の前までやって来た。

ほんとに目の前にね！ち、近いって！！！

「なんでそんなに機嫌がいいの？」

「え？なぜです？」

「盛大に鼻歌歌ってたから…」

「え？そうでしたか？」

え！無意識ですか！！

「うん。えっと、フンフンフ〜ン♪って感じの。聞いた事ない歌」

「あぁ…それはジュエル王国の国歌ですね」

「へぇ！そうなんだ！なんだか華やかな曲なんだね」

「気に入っていただけましたか？お嬢様も早く覚えてくださいね」

え！ど、どして！？

話の展開に頭がついていかなくって、目を見開いたあたしに、目の前のセルジュさんは妖しげな微笑みを浮かべた。

「私の国に来てくださるのでしょう？」

「へ？」

相変わらずあたしの頭はセルジュさんの話についていかない。ジュエル王国に行く？行くって言ったっけ？

えぇと、え～～っと？思い出せあたし！！

一生懸命記憶を遡って、あたしはひとつの記憶に辿り着いた。

そうだ。おじいちゃん……！セルジュさんのおじいちゃんと約束したんだ。

時々会いに来ますから、その時の搭乗券だけ甘えさせてくださいねって話した……。

「うん！行くよ。約束したもの」

やっとセルジュさんの話に追いつけて、ほっとしたあたしだったん

だけど…
実はまだ、セルジュさんとの会話にはズレがあったらしい……。
勿論、この時はまだ全然気がつかなかったんだけれども。

あたしの返事を聞いたセルジュさんは満足気に微笑みを投げかけると、あたしに
ぽふん。と帽子を被せた。

「さ。参りましょう。東京駅でお土産を買うのでしょう?」

「うん!そう、そうなんだよー。芋ようかん!」

「奥様がお好きなんですか?」

「ウチの家族全員好きなんだよ~」

あ。最近色々ご近所さんから頂き物も多いし(セルジュさん目当てだけど!)
多めに買った方がいいかな?

音もなく静かに動き出したエレベーターの中で、ふと思い出した。
明太子にお米に蟹に…えっと、プリンとか。あぁ、あのプリン美味しかったぁ~。
でも全員に買ったら一体何個買わなきゃいけないんだろ!?
そんな事を考えていると、いつの間にかフロントに着いていた。
でもやっぱりセルジュさんが向かうのはあの部屋で……ついて行こうとしたら、
「お嬢様はソファに座ってお待ちください」と言われてしまった。
じゃあその間にママにお土産の相談をしようっと。

見渡すと、ロビーには空いているソファがひとつだけあり、そこに近づくと隣のソファに
座っていた女性が勢いよく立ち上がった。

「湊！」

あたしの背後に向かって、切羽詰ったような声をかける。

驚いて振り返ると、背の高い日焼けした肌の男性が駆け寄ってくるところだった。
この人……どこかで見た事があるような……。
隣の女性もサングラスをかけてるけど、どこかで見たような…。

きっとじっと見ていたんだろう。ふたりはあたしに視線を走らせると、男性はさっと
サングラスをかけ、すぐさま視線を逸らした。女性は持っていたバッグで顔を
隠すようにしてあたしに背を向けると、2人は急いでホテルから出て行った。

む。なによぅ、あれ。

少し嫌な感じを受けたけれども、誰だったか思い出せないので気を取り直して
ママに連絡すべく携帯を取り出すと、ちょうど着信があって驚いて携帯を取り落とす
ところだった。
あわわ。危ない危ない！

「もしもし。お姉ちゃん？」

「あっ、みはる！！」

「どしたの？慌てて。あたし何か忘れ物でもした？」

「ううん。そうじゃないの！あの……セルジュさん一緒かしら…」

「えっと…今チェックアウトしに…どしたの？」

「ウチの…トップモデルの湊、覚えてる？」

その言葉で、あたしの頭の中では、以前お姉ちゃんが自慢げに話していたモデルの湊さんと、
さっき「湊」と呼ばれた男性が一致した。

「あぁ！どこかで見たと思ったらお姉ちゃんのとこの湊さんだったんだ」

「え！？どこかで見たの？」

「ん？今ホテルのロビーでね。女の人と一緒に出て行ったから……」

「女と！？それ……高橋さんじゃない？」

「え？……あ。そう、かも」

そうだ。どこかで見たと思ったら、お姉ちゃんの家に通いでやって来てるお手伝いの
高橋さんだ。
やっぱり見た目に拘るお義兄さんが、お姉ちゃんが選んだお手伝い

さんの中で
やっと認めてくれたお手伝いさんだって言ってた人…。

「あれ?どうして一緒だったんだろ…」

「…逃げたのよ……」

「え?」

「湊は事務所の稼ぎ頭で、大きな仕事が湊を名指しで入ってきて、殆ど休みが無かったの。
更に……有名ブランドの社長令嬢に気に入られてて…あの人、交際するよう迫ってたから…」

「はぁ…」

なんとも義兄のやりそうな事だわ…。あのツンとした高橋さんも、辛い恋をしてたのかな…
そう考えると、ついさっき手を繋いで出て行った2人を応援したくもなった。

「2人がお互い好きなら、それでいいじゃない」

「そんな問題じゃないのよ!今日、CM撮影なのに湊が時間になっても来ないって連絡があって……。
先方は湊本人か、それ以上のモデルをすぐに用意しないと訴えるってカンカンで…それで…」

「それで……セルジュさんなの?」

高橋さんを雇ったのはお姉ちゃんだ。そして、住居部分以外…つまり、モデル事務所の
方にも出入りさせたのも、お姉ちゃん。
その高橋さんが、看板モデルの湊さんと逃げた。お姉ちゃんはその
責任を押し付けられて
いるのかもしれない。

「私が、どうしたのです？」

いつの間にか傍に来ていたセルジュさんが目の前で跪き、心配そう
にあたしの顔を
覗き込んだ。

「お姉ちゃん……から。セルジュさんに助けて欲しいんだって」

それだけ言って、セルジュさんに携帯を渡した。

「私に？……もしもし。お電話代わりました。セルジュですが…ええ」

話しながら少し離れるセルジュさんの横顔が、なんだか知らない人
に見えた。

「モデルの、代役を頼まれました」

戻ってきたセルジュさんが、困ったような笑顔を見せた。

「そっか。…どうするの？」

「お嬢様は、どうして欲しいですか？」

さっきと同じように、目の前に跪いて目を覗き込むセルジュさんの目を、あたしはなんだか見ていられなかった。

「あたし？」

「貴女の望むままに」

「手伝ってあげて。お姉ちゃんを、助けてあげて」

「……本当に、それで良いのですか？」

「……うん」

この時は、本当に助けてあげて欲しいって思ったんだもん。それは本心のはずだったけど、

「本当に？」と聞かれても目を見て答える事が出来なかった。

代役は執事さん（後書き）

あっ。久しぶりなのに、ちょっと！またもやシリアス？
なのにジャンルはコメディー？って感じですね。……ご、ごめんなさい（汗）
その分明るい場面が引き立つ…と、信じて！

「そう、ですか」

セルジュさんは少し寂しそうに笑うと、一度強く目を閉じた。
その後開かれた明るいブルーの瞳からは、もう寂しげな色も消え、
そこからは
強い意志が見えた。
そんな、そんな強い眼差しだった。

その強い眼差しで、セルジュさんは「では、ここでお別れです」と
言った。

その言葉はきっぱりとしていて。

思わず縋るように見上げてしまった。
でも、セルジュさんの表情が揺らぐことは、無かった。

先に手を離したのはあたしの方だ……。義兄に何の義理もないセル
ジュさんに無理な
お願いをしたのも。
なのに、1人になりたくないなんて…なんてあたしは我侭なんだろ
う。

矛盾に頭が混乱するばかりで、きっとあたしはぼうっとソファに座
り込んでいたんだと
思う。
セルジュさんは自分のライトブルーの携帯を取り出し、あちこちに
連絡を入れていた。

でもそれは、大体が日本語じゃなかったから、どんな話を誰としているのかも
分からずに、あたしは意味の分からない言葉をただ聞き流すだけだった。
いつも、あたしに分かるよう日本語で話してくれたじゃない。ぼうっとしながらも
またそんな我侭な思いがよぎる。

一通り連絡が済んだのか、セルジュさんが急かすようにあたしを立たせた。

「代わりの人間を呼びました。もうすぐこちらに参ります。ご自宅までは
その人間が
付き添います」

「…え？あたし、1人で帰るの？」

まただ。頭の片隅にいる冷静なあたしは、セルジュさんはあたしのお願いで、
すぐにお姉ちゃんの言うスタジオに向かうんだよ。1人で帰るの当たり前じゃない。って言ってる。
でも、どこか理解できない自分もいるんだ。だからこうしてまた我侭な行動に出てしまう。

「お嬢様は、明日からお仕事でしょう。私が仕事をする事も、ずっと勧めてくださってたじゃ
ないですか。やっと仕事が見つかるかもしれないのに、喜んでくださらないのですか？」

ズルイ。こんな時にそんな風に逃げる。

確かにただの居候みたいだって言った事はある。根っからの庶民なあたしには、
無職ってなんか『保障』が無くって不安で、ただあたしの為に毎日を消化する
セルジュさんにそれとなく就職を勧めてきた。
けど、それはこんな形じゃなくって……じゃあ、どんな形の『就職』なら良いの？
ここであたしは、なんで『離れて働く事』が嫌なのか、益々分からなくなってきた。

「お嬢様？」

「もっと、別の仕事だってあるじゃない。地元で、探したら……！」

「お嬢様」

両肩に手を置かれ、軽く身体を揺すられた。

「少し、落ち着いてください…今からお姉様の手伝いに行って参ります。それには
私は東京に残らなければいけません。…分かりますね？」

カクカクと、まるでロボットのように機械的に頷くあたしに、セルジュさんはやっと
笑顔を見せた。

「採用されないかもしれません。不採用でしたら、すぐに追いかけますよ」

そんなの慰めにしかならない。お義兄さんは、きっとセルジュさん

を離さない。
自分の直感なんて今まで信じた事はなかったけれど、これには自信があった。
セルジュさんは、帰って来ない。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

あの日、あたしはどうやって自宅に戻って来たか分からない。
気がついたら家でママお得意の肉じゃがで晩御飯を食べていた。
あたしは大使館の職員だという若い男性に連れられて帰って来たんだそうだ。
ママに頼まれた芋ようかんも、買った覚えは無いんだけれどご近所に配っても
まだ余る位に大量に買い込み、付き添ってくれた男性が両手に紙袋を提げていたのだと
言う。

我に返ったのは、ママの発言だった。
「みはる。サドルの高さ、調節しておきなさいよ」
「へ？」

「へ？じゃないわよー。明日から仕事でしょう？自転車のサドル、調節しておきなさいよ。
明日の朝バタバタする事になるわよ」

「自転車？」

ママが小さくため息をつくと、あたし達が帰って来る前にセルジュさんから電話があり、事情を説明された事。すぐにセルジュさんの代理人という人が来て、
セルジュさんのベンツを持っていく代わりに、新しい自転車が届けられた事を説明してくれた。

なんて手回しの良い……それは寂しい位の速さで、あたしの周りからは段々セルジュさんの
痕跡は消えていった。

セルジュさんの部屋からはとうとう荷物も運び出され、この家の中にセルジュさんを
思い出すモノはもうわずかとなったある日。

「あ」

目に付いたのは新聞の一面広告。

有名ブランドが新しく発表した話題の香水の広告だった。
素晴らしくスタイルの良い男性のシルエットが写るだけの広告だったけれど、
あたしにはすぐにそれがセルジュさんだと分かった。

その日から、雑誌だったりテレビCMだったり、電車の中吊り広告だったり、駅のポスターだったり…
色々な場所でセルジュさんを見かけた。
街中で見かける小さなセルジュさんは、シルエットだったり、逆光に浮かび上がる微かに金髪が分かる横顔だったり、印象的な瞳のアップだったり、王子という立場からか、決して人物を特定できないものばかりだったし、唯一見せた瞳も、紫色のカラコンで色を変える念の入れようだった。
でもそれが却ってミステリアスなモデルとして脚光を浴びる事になり、街で、テレビで、セルジュさんを見ない日は無い程になった。

「みはるちゃん、元気ないー」

「まゆさん」

仕事中、レジカウンターの中でぼうっとしてしまってた。

「原因は横井くん？それとも…」

「ヨコイ？……あ！」

忘れてた！あたしってば横井さんの事をすっかり忘れてた！

「あーー。違うならいいの。横井くん異動になったみたいだから、そのまま忘れちゃって」

慌てて話すまゆさんの言葉にも、不思議とショックは感じなかった。
いつの間にか、あたしの中から横井さんは姿を消していた。そんなに簡単に消える
存在じゃなかったはずなのに、もっと強い存在にかき消されてしまったかのように、
横井さんの居場所は消えていた。

「でも、忘れさせた張本人が居なくなったら意味ないわよねぇ…」

「え？」

「ううん。何でもない。本当はみはるちゃんに話があったんだけど、今度にするわ。
今はそんな時機じゃない気がするし」

「はぁ……」

その言葉に少し引っかかりと感じたものの、何かを考える余裕も無かったので、
その言葉に甘える事にした。

その内、セルジュさんは『謎の外国人モデル“Ｓ”』として、週刊誌をも騒がせる事になった。
各誌、その正体を実はハリウッドスターだとか、ハーフの新人モデルだとか
書いては今までの広告写真で検証していたが、どの記事もセルジュさんの正体に
迫ったものは無かった。
パパもママも、正体は気付いていたものの、お姉ちゃんが絡んでる為口外はしないで

いてくれていたし、ご近所の方も元々セルジュさんはウチにホームスティしてると
聞いていたから母国に帰国したのだろうと思っているみたいだった。

「ママ！今度は“Ｓ”の正体は有名サッカー選手だって！」

謎の人気モデル“Ｓ”の正体を暴こうと巻頭５ページを使った週刊誌を手に、ママと
「えー！全然似てないわよ！」などと楽しく話していたその時、

ピンポン♪

午後１０時という、来客にしては少し遅い時間に訝しく思いながらもママが玄関に出ると……

「みさき！！悠馬も！どうしたの！？」

え！お姉ちゃん！？
あたしはビックリして玄関に走った。お姉ちゃんとはあれ以来、なんか気まずくて
話すのを避けていた。
でも悠馬まで連れて突然来るなんて…何があったんだろう！？

「お姉ちゃん！？」

「ママ、みはる。あの家、出て来ちゃった…」

「え！？」

ビックリするママとあたしの前で、お姉ちゃんは晴れやかな笑顔を

見せている。
悠馬も、「出てきた」という意味は理解しているらしく、「僕、こっちの学校に
通うんだ！」なんて言っていた。

「えっ…とにかく、入って。もう、こんな遅くに子供と2人だけで危ないじゃない」

「大丈夫よ。彼に送ってもらったもの」

「彼？」

「そうよ。荷物も持ってくれてるの。……みはる、長く借りちゃって、ごめんね」

お姉ちゃんはそう言うと、後ろに声をかけた。

現れたのは……少し表情は疲れていたけれど、あたしの記憶にある通りにキランキランな
セルジュさんだった。
いつも傍にあった、あの大好きな明るいブルーの瞳が、あたしに真っ直ぐに向けられている。
目の前にいるのが本当にセルジュさんなのか信じられずに、あたしは裸足のまま
玄関に下りる。
お姉ちゃんは何も言わず、道をあけてくれた。

目の前のセルジュさんは、ほんの少し痩せた気がする。反対に髪は少し伸びたかな。
でも、本物かな……。

手を伸ばしてペタペタと頬を触るあたしの行動に驚きもせず、セルジュさんは優しい眼差しで
少し身を屈ませると、あたしに視線を合わせた。

「お嬢様、ただいま、戻りました」

明るいブルーの瞳に真っ直ぐに見つめられ、そう言われると、あたしの胸は
熱く大きなものでいっぱいになった。
はちきれそうになったそれは、溢れるように涙になって出てきた。

あぁ、あたしの中は、いつの間にかセルジュさんでいっぱいだったんだ……。

小さな執事さん、大きな執事さん（後書き）

鈍感なヒロイン。やっと何かに気付いたようです？

執事さん、探偵になる（前書き）

たいっっっへん、お待たせしました！！
ふたりが離れ離れだった間の、セルジュ側のお話です。

看板モデルが消えた。

その騒ぎは、思った以上に大きいようだった。

おまけに、消えた原因は交際していたと思われるお手伝いの女性との駆け落ち。その女性を雇ったみさきさんは、かなり責任を感じているようだった。

慌しくお嬢さまを送り出した後、みさきさんに指定されたスタジオに向かったが外からでも、看板モデルの失踪劇で現場は大混乱しているのが分かった。

スタッフと思われる人間が何人か、それぞれ携帯電話を片手に苛々した様子で居るのが分かった。きっと湊（みなと）とかいうモデルの行方を捜そうとほうぼうに連絡をしているのだろう。

「チッ！」舌打ちしながら電話を切った、無精ひげがお洒落なのかただの無精なのか判断がつきかねる男と、目があった。

「あ！！！あの、さ。もしかして。代理？湊の、代理モデルかなぁ！？」

「えぇ…社長夫人の推薦で、参りましたが…」

男は近づいてくると、私の全身に視線を走らせた。

ヤメロ、気持ち悪い。私を凝視していいのはお嬢さまだけだ。ムッとするが、勿論顔には出さなかった。

「いや！いいよ！君、すっごく良いと思うよ！社長もすっごく気に

入ると思うなぁ！すぐ案内するよ！」

なんだ。お前まで。その「すっごく」は伝染するのか？

男の口調に嫌悪感を覚えた私は、口角をわずかに上げただけの微笑みで、男の動きを先に促した。

3階のスタジオに着くと、異臭がした。

おかげでどの方向にお義兄さまがいるかが分かってしまう。臭ったのはセットが組まれ、カメラマンやアシスタントが待機している場所とは反対側からだった。

臭いにつられてそちらを見ると、メイクルームだろうか。ほんの僅かに開いたドアの隙間から、手を取り顔を寄せ合って話をする親しげな男女が居た。

よくあんな異臭のする男と、あんなに顔を寄せ合っていられるものだ。

私より先に到着したらしいみさきさんは、一緒に暮らして嗅覚が麻痺してしまったのか？そう思った瞬間、女が顔を上げた。

女は……みさきさんでは無かった。

どういう事だ？思わず眉を顰めるほどに、その様子は親しげで…いや、それ以上に思える雰囲気を感じさせた。

これは私の勘だが…間違ってはいないだろう。それだけ、2人の周りには濃密な空気が漂っていたのだ。

「あっいた。あ、すんません。ちょ～っと香水キツイすよね。しゃちょーいつもなんで、悪いんすけど、ちょっと我慢してくださいね！」

私が眉を顰めたのを、勝手にいいように解釈した男は、ずかずかと

部屋に近づく。

「しゃちょー！代理のモデルさん来たんすけど…」

男に遠慮なくドアを開けられた室内からは既に先程の濃密な空気は無く、適度に距離を保った2人が現れた。

「あらぁ！！まあまあまあ！代理って君なの？僕、すっごくラッキーだなぁ！今、湊以外なら、街でスカウトした子がすっごくイメージにピッタリだったのにって社長と話してたとこだったの！」

ね？とお義兄さまが振り返った先で、先程までお義兄さまにしなだれかかるように寄り添っていた女は、それまでの濃密な女の香りを見事に消し去り、今は凛とした佇まいで私に冷静な目を向けていた。その姿を見れば、背格好はみさきさんに似ているが随分と雰囲気が違うのが分かった。

「ええ。そうですわね。この子なら思った以上に良い広告ができると思うわ。時間が押しているから、早速メイクに取り掛かってもらえる？前後逆になるけれど、契約書は後にしてもらえるかしら？」

「僕は合格。って事ですか？」

「勿論よぅ～！君が来てくれたんだもの。湊なんてもう必要ないから！」

看板モデルを「なんか」呼ばわりか。その変わり身の早さには呆れる。

部屋の外に呼びかけると、俄然スタジオが活気付いた。

「タケちゃん、メイク呼んで！」

どうやら私を案内してきた男は「タケちゃん」と言うらしい。メイクを呼んでくるようにと言われたタケちゃんは、はっとしたようにドアに向かった。

そのタケちゃんに近づき、お義兄さまが耳打ちした言葉を、私が聞き逃すはずがなかった。

「湊を徹底的に探せ」

もう必要ない。先程そのように言われたモデルを、そんなに執拗に追うのはなぜだ？

どうやら、モデルの代役だけでは済みそうになさそうだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

「だからって……なんでこうなるんだ？」

「うん？まずは形から入らないとね」

ここは都心の一等地に建つ、高級マンションの一室。

一室とはいえ、それは高層マンションの最上階に一戸だけというペントハウスの一室だ。

重厚なマホガニーのデスクの端に腰掛けて、呆れたように聞く男がいる。光の加減によっては白っぽくも見える薄い金色の髪に、アメ

ジスト色の瞳を持つその姿は否応なしに一目を引く。
それに、彼は一族の誰よりも私（セルジュ）によく似ていた。

「形から？」

「そう！このマホガニーのデスクセットに、壁紙は落ち着いたアイボリーの幅広のストライプ…窓には、ダークブラウンのブラインド！」

「まさか……大学の時、一緒にハマってた探偵クリフォード！？」

さすが、一緒に留学していた仲だけあって、彼はすぐに気付いたようだ。

「あれはマニアックだったからか、第1シーズンで終了してしまったのが実に惜しかったな」

「そうなんだよ……って！！違うだろ！何だそれ、探偵って、モデルの代役だけじゃないのか！？…もしかして、それで俺を？」

「安心しろ。某国情報局からスカウトが絶えないお前には、簡単な仕事だ。オフィスもそれらしくしたから、俄然やる気も出ただろう？」

「…ハイハイ。どっちにしろ、俺の仕事はお前の護衛だからな。いずれ呼ばれるだろうとは思っていたが…で？何を調べるんだ？」

彼の目の色が変わった。その目前に、名刺を2枚を出す。

「モデル事務所社長の木嶋辰彦（きじまたつひこ）３８歳。お嬢さまの義兄（あに）だ。そして、

今回広告契約を結んでいるアパレルメーカーＬｅ　ｃｉｅｌの女社長、吉田百合子、３８歳だ。この２人の関係。それと…」

今度はみさきさんから預かった書類が入った茶封筒を渡す。

「こっちは？別件か？」

「いや。私が代役をする事になった原因…失踪したモデルの湊こと、設楽港（したらみなと）、２６歳と、一緒に消えた高橋真樹（たかはしまき）、２９歳だ。湊はＫＩＪＩＭＡの看板モデルで、女の方は木嶋社長の自宅兼事務所のお手伝いだった。

木嶋社長は、代役が決まった後でも湊を探してる。きっと、何かあると思う」

「了解。４人の内２人は写真もあるし、そんなに難しくはないだろう。そのパソコン、使っていいんだろ？ドラマのセットみたいに飾りモンじゃないよなぁ？」

湊のプロフィールシートと、高橋の履歴書はもう覚えたと言わんばかりに乱暴に茶封筒に戻しデスクに滑らせ、胸ポケットから細身のシルバーフレームのメガネを取り出した。どうやら仕事モードになったらしい。

「勿論。すぐに使えるさ。私はまた撮影があるんだ。すぐに出るが、この部屋の物は好きに使ってくれ。」

すると、パソコンの電源に向かった指が止まった。そしてジャケットを羽織っていた私に心配そうなアメジスト色の瞳が向けられた。

「なぁ、ほんとにモデルやるのか？お前が顔を出すのはマズイだろ

う」

「大丈夫だ。ビザの問題があると言ったら、シルエットだけとか、使用するカットは素性が変わらないようにしてくれるとさ。かえってミステリアスで話題になるだろうって言ったらすんなり飛びついた」

「それはそれは…さすがセルジュ様。じゃあ勿論、芸名も用意してたんだろう？」

私の返事を聞いて安心したのか、一転してからかうような声色になる。

「勿論。Ｓ（エス）だよ。」

「あぁ、Ｓｅｒｇｅ（セルジュ）のＳか。」

ある事を思い出して、私はドアノブに手をかけたまま彼を振り返った。

「言い忘れた事がある。契約書にはフルネームを書かなきゃいけないからね。お前の名前を書いておいたよ。シモン。」

「は！？」

「Ｓは、Ｓｉｍｏｎ（シモン）のＳだ。お前が私にそっくりで良かったよ。さすが、私のはとこだね。」

「ち、ちょ！！！待て！」

後ろで騒いでいたシモンの声は、完全防音の部屋のドアが閉まるとあっけなくかき消された。

執事さん、探偵になる（後書き）

セルジュ側のお話、ほんとは1話で終わるはずだったんですが、終わりませんでした。
次回もまたセルジュ側のお話になります。

執事さんのミッション（前書き）

突っ込みどころ満載だと思います（ー＿ー；）
こーゆー事件とか法律とか…苦手だ……矛盾点もイッパイあると思いますが、
さらっと読み流してくださいｍ（＿）ｍ

執事さんのミッション

眩しい照明に照らされても、目を細める事もなければ、まだ充分暖かいというのに冬物の重ね着を強いられても汗ひとつかかずに堂々とカメラの前に立った私を見て、一瞬スタジオが静かになった。

「……始めてもよろしいですか？」

その言葉で、ようやく短く刈り込んだ髪と顎鬚に白いものが混ざり始めた壮年のカメラマンがはっと気付いたように動き出した。

「ベテランが圧倒されるなんてな。とんでもない新人が出てきたもんだ。今日は何カットも必要なんだが…さっさと終わらせれんの？」

男のスタイルから、フランスの名優に影響を受けているのだろうという事は容易に推測できた。

彼の口調は嫌味っぽいが、丸メガネの向こうの目は好奇心に輝いている。始めは具体的にポーズを要求していたカメラマンも、今では無言で次々シャッターを切る。

近付いたり遠ざかったり、しゃがんだり寝そべったり。次々ポーズを変える私の動きを全て捉えようでもするかのように忙しく動き回るカメラマンは反対に汗だくだった。

タートルネックのセーターにロングトレンチコートを着て、ポーズをとっていた私が動きを止めると、男はカメラをアシスタントに渡し、近付いてきた。

「予定の時間を3時間も縮めたな。捨て写真なんかほぼ無いだろう。お前さんとはまた組みたいよ。シモン…だったな？」

「シモン・ラリューです。フランスからの留学生です。」

差し出された大きく分厚い手を軽く握ると、力強く握り返してきた。

「なぁ、全身が出せないなんて、勿体無いよ。何とかならんのか？」

「留学生の身ですし…先生の腕ならば、一部のみの写真でも充分作品になりますよ。」

「言ってくれるなぁ、オイ。まかせとけ。すぐに日本中がお前さんが誰だと躍起になって探すだろうさ。」

ニヤリと笑って、男は「ご苦労さん」と肩に軽く手を置いた。

そんな撮影の様子を遠目に見ていたお義兄さまは踊りださんばかりに喜んだ。

「すっごいわ～！ほんとにモデルやった事ないの？ポーズもすっごいサマになってるし、照明、まぶしくないの？あのセンセ、すっごく厳しい事で有名なんだけどなぁ。すっごくもう惚れこんじゃった感じだよー！」

興奮したように頭ひとつ低い位置から見上げてくるお義兄さまに、曖昧な笑顔を返事とすると、そうか…背が高いから余計香水が刺激臭となるのか？匂いは上へくるというからな…。そんな事を考えていた。お嬢さまの上目遣いなら大変可愛らしく、いくらでもどんとこいなのだが、いくらお義兄さまといえども、男からの上目遣いは嫌悪感しか生まれない。しかもこの激臭、さっさと撮影を終えたくてどんな角度でも完璧な私になるよう計算しているのだから、サマになるのは当たり前だ。

「でもさぁ、カラコンなんて必要かなぁ？ブランド名だってＬｅ Ｃｉｅｌ（青）なんだし、シモンくんの綺麗なブルーの瞳の方がブランド名に合うんじゃなーい？」

その言葉で、目の前のお義兄さまに意識が戻る。

「Ｌｅ Ｃｉｅｌと言えば…今日は吉田社長はいらっしゃらないんですね」

すると、お義兄さまは何とも分かりやすく私から少し身を引いた。

「あぁ～、あの方はお忙しい方だから…昨日のロケを見て、シモンくんで間違いはないってあの後すっごく褒めてたわよ～！」

「あの後？ご一緒だったのですか？」

「えっ！？あぁぁぁぁ…まぁ、そう…えぇっと、打ち合わせを兼ねたディナーをね！お互い事務所がすっごく近いから、よくあるのよ～」

「あぁ…事務所が近いんですか。それは便利ですね」

「そ、そうなのよ～すっごく、便利なのよ。あっ、ホラ、次の衣装は？ほらほら、変えなきゃ！あのカメラマンさん、怒ったらすっごくコワイのよ～！ねね？行ってらっしゃ～い！」

慌てたようにそう言うと、お義兄さまは既に帰り支度を始めているカメラマンの方向を指差し、「タケちゃんっ、ホラ、報告はっ？」とタケちゃんを引きずってスタジオを慌しく出て行った。

「今日の撮影はもう終わったんですけどねぇ。」

何とも分かりやすい人だ…予想以上にボロを出してくれる。もう一度スタジオのドアを見ると、私も帰り支度を始め携帯を取り出した。すると、メールが届いていた。発信者は本物のシモン。

『報告したい事がある。そろそろ本格的に動けるぞ。クリフォードルームで待つ』

それを見て、ふ。と笑みがこぼれる。

「あら、素敵な笑顔。恋人ですか？」

メイクアシスタントの女性に声をかけられた。

「遠距離中の愛する人に、もうすぐ会えそうです。」

そう、もうすぐだ。その為の準備は抜かりない。

――

「脱税？」

クリフォードルームの応接セットでシモンと向き合って座った私は、思わず聞き返した。

勿論、この応接セットも探偵クリフォードのセットを模している。が、こちらは本物のアンティーク家具だ。向かい合って6人が座れる応接セットだが、座っているのは私とシモンの2人だけ……クリフォードルームを完璧に再現したこの部屋を他に見る人が居ないなんて、なんとも寂しい事だ。もっとも、あのドラマは日本で放送されていないので、誰も気付かないと思うが…。

「脱税…の、疑いがあるって段階だ。」

正直驚いた。あんなに分かりやすいお義兄さまが、まさか犯罪に手を染めようとしているとは…。

「疑惑はここ数ヶ月ほどの事だからな…まだ税務署も動いていない。意図的なものなのかはまだ把握していないだろう。どうやらＫＩＪＩＭＡとＬｅ　Ｃｉｅｌ間の契約金額と実際の額が違うみたいなんだ。その他の会社とは問題ない。」

「何が違う?」

「モデルのギャラだ。Ｌｅ　Ｃｉｅｌは湊を指名し、多額のモデル契約料を支払ったことになっているが…湊の他ブランドとの契約から見ても、それは破格の額なんだ。何%かがＫＩＪＩＭＡに入る計算にしても…破格すぎる。2社間では他もあるかもしれないが、証言が取れてるのはモデル契約料だ。それに…」

「木嶋社長と吉田社長は不倫の関係だ。か?先程の証言は誰から?」

「あぁ。そこは読んだ通り。証言は、湊だ。連絡は取れた。証拠が欲しいし、できれば2人で姿を見せて欲しいとは伝えてある。それと…」

「それと？」

「吉田社長は、１年前に夫を病気で亡くしている。大学生の１人娘がいるが……父親は木嶋だ。」

「ただの不倫では無い、ということか？」

シモンの話をまとめると、こうだった。

若い頃、木嶋と吉田は恋人同士だったが、吉田の父親に交際を反対され破局。吉田は見合い結婚するも、その時には木嶋の子供を身ごもっていた。

木嶋はその後、モデル事務所社長として成功し、みさきさんと結婚するわけだが、吉田の面影をみさきさんに見ていたようだ。それほどに２人は背格好が似ている。だが、性格は正反対なので、吉田の面影も見れなくなり自然と木嶋は家庭から離れ、仕事に没頭していった。

そんな時、仕事場で吉田と再会。彼女は未亡人となっており、また恋人関係に発展した。

今度こそ、吉田の父親に自分を認めてもらおうとした野心が、間違った方向に向いてしまったようだった。

更に…木嶋が最近になってＤＮＡ鑑定をしているのが分かった。相手は、吉田の娘と、それに悠馬くん。

「息子のＤＮＡ鑑定もか？」

「……離婚したいのさ。万一、悠馬くんが自分の息子じゃなかったら、それを突きつけて離婚するつもりだったんだろう。」

「最低な男だな…だが、みさきさんを犯罪者の妻にするつもりはない。すぐに動くには…証人に、証拠、か…」

その時、インターフォンが鳴り響いた。映ったのは、このマンションのコンシェルジュ。

「設楽様と、高橋さまがお越しでございます。お通しいたしますか？」

「すぐに通してくれ！」

「シモン、任務が増えたぞ。みさきさんと悠馬くんも連れて帰る。」

あんな男の傍になんて、置いておけない。

部屋に入ってきた2人は、少しやつれているように見えた。

まだ我々を警戒しているのか、なかなか座ろうとしない2人に、簡単に自己紹介し、みさきさんの名前を出すと安心したのかやっと座ってくれた。

「この1週間、どうしていたんですか？あの男は、部下を使ってあなたたちを探そうと躍起になっていましたよ。」

すると、女の細い方がぴくりと反応した。その肩を、大きな手で包み込み、男が引き寄せ話し出した。

「それをお聞きして、こちらに来たんです。社長…やばい事してるみたいで…俺、それ知っちゃって…。」

「調べはついています。なるべくなら事件にはしたくない。すぐにでも修正申告させたいのですが、何か証拠となるようなものはお持

ちですか?それと、知った経緯は?」

「俺、社長には内緒で、お手伝いだった彼女を付き合ってて…そしたら彼女、事務所で金額の違う契約書2枚を見つけたみたいで…俺のギャラも知ってたから、おかしいって相談してきたんです。」

「私、実は以前税理士事務所で働いてたことがあるので、ちょっと引っかかって…」

「それからです。社長がデカイ仕事、俺に回すようになって、しかもＬｅ　Ｃｉｅｌの娘が俺のファンだとか言って無理矢理紹介しようとするし。…でも、実際会ったら全然俺のファンじゃないし。これってもしかして…」

湊は身を乗り出すようにして話し、私とシモンを交互に見た。
それに応えたのはシモンだった。

「口止め、それかあわよくば共犯にでもなってもらうつもりだったんだろう。」

「それで怖くなって逃げたんです。でもあの仕事好きだったし、戻りたい…どうにかなんないすかね?」

「どうにかしますよ。君たちは数日、このマンションの客室を使ってもらえますか?すぐに自宅に戻れるし、仕事にも戻れますから。何か資料はありますか?」

「彼女が見つけた契約書のコピーと、俺のギャラの明細書ですけど…」

「充分ですよ。ありがとう。さ、部屋に案内させますよ。シモン、2人をよろしく。」

「あ！あの！！」

「はい？」

「俺…ほんとに仕事に戻れますか？」

「勿論。モデル事務所の社長が変わるだけで、他は今までどおりですよ。」

にっこり笑った私に、2人は深々と頭を下げた。

それからの展開は早かった。

あの後、先にみさきさんの元に向かったが、悠馬くんのＤＮＡ鑑定の事を知ると離婚を決意。一緒に戻ることを約束してくれた。一番ぐずったのはやはりこの男かもしれない。あれこれと理由をつけて逃げようとする。この期に及んで、まだ自分が危ない橋を渡っているとは気付いていないらしい。

反対に潔かったのは同席していた吉田社長だ。口止めに材料に愛娘を使われていたことに大激怒。その場で別れを切り出したのだ。放心状態の木嶋社長から私に向き直り、清々しいまでの笑顔を見せた。

「私のプライドに賭けても、この人に修正申告させてキチンと整理するわ。まかせて頂戴。」

「よろしいのですか？」

「勿論よ。でなきゃキッパリ別れられないでしょ？娘と2人で生きて行くには、乗り越えなきゃいけないものね。」

その言葉で、ようやく危機を感じたらしい木嶋社長は、吉田社長に縋るような目を向けた。

「ゆ、百合子？それはどういう…」

「あぁ、木嶋社長には手続き終了後、社長も辞任していただきます。」

「え！？」

「当然だわ。看板モデルを危険な目に合わせて。そんな社長に誰がついてきます？」

もはや吉田社長もこちらの味方だ。

「だ、だって。僕が大きくしたんだよ？誰が出来るって言うの！」

「大丈夫です。ウチには優秀な人材がおりますから。」

笑みで返すと、今度は胸ポケットから慌てて携帯電話を取り出した。

「そ、そうだ！みさき！みさきなら僕の気持ちが分かって…」

「あぁ、そうだ。みさきさんから、こちらを預かっています。離婚

届。もうみさきさんはサインしていますよ。すぐに、サインして欲しいそうです。印鑑もお預かりしていますが？」

目の前にペラン。と1枚の紙を見せられた木嶋社長は、全身から力が抜けたように膝からくずおれた。

木嶋社長は、一晩で地位も、名誉も、妻も、恋人も、そして子供達までもを失ったのだった。

執事さんのお引越し

気がついたら、朝だった。

なんだろう。足が痺れて腕がダルイ。

でもあったかい～その心地よさにもう少し浸っていたいな。

まだまだ寝ぼけた状態で、すりすりとそのぬくもりに擦り寄った瞬間。

頭の上から笑いを含んだ声が落ちてきた。

「ふふっ。くすぐったいですよ。」

その声に、あたしは一気に目が覚めた。

恐る恐る目の前の擦り寄った物体を見ると、それはカジュアルだけれどもとてつもなく肌触りの良い、趣味の良い淡いブルーのシャツで。

更にギギギと音がするほどにぎこちなく顔を上げれば、その先であたしに向かって微笑む明るいブルーの瞳にぶつかった。

「なななな、なんで！？」

慌てて身体を起こそうとするも、無理な体勢でいたのだろう。足の感覚が無く、すぐにバランスを崩してしまった。

バランスを崩した身体は、元居た場所…すなわち、セルジュさんの腕の中に戻ってしまう。

「お嬢様は甘えん坊さんですねぇ。」

ち、ちがーーーう！！！

「足！足が動かないよ！」

そう必死にアピールするも、新たに背中に回された腕を解こうともせずにセルジュさんは「そうでしょうねぇ」などとさらりと受け流す。

なぜ！？そもそも、なぜこんな体勢に！？

視線を周囲に走らせると、ここはあたしの部屋。見える景色から、ベッドの上に並んで座り、その状態でセルジュさんに身体を預けて眠ってしまったみたいだ。

今更ながら、ベッドの上という事で羞恥心があたしを襲う。

なんで？なんでこんな展開に！？

「もしや、昨晩の事を覚えてらっしゃらないのですか？」

「セルジュさんがおねーちゃん達連れて帰ってきたのは覚えてますー！ていうか、あの！とりあえずこの体勢がかなり恥ずかしいですー！」

そう。なんでか、の前に、冷静に考えるためにもまずこの体勢をどうにかしたいのだ。

横座りの状態で、上体をセルジュさんに預けていたため、下になっていた足の感覚がすっかり無くなっている。その上、無理な体勢で長時間いた為か、腰にも違和感がある。恥ずかしいのに、１人ではどうにも起き上がれないのだ。

「仕方ないですねぇ。」

渋々、といった具合にセルジュさんが腕を解くと、あたしの上半身をゆっくりと寝かせ、長いこと下敷きになっていた左足をゆっくりマッサージしてくれた。

「うう…すみません…」

「いいえ。こうして、お嬢様にまた触れられて嬉しいのですから…お気になさらずに…お嬢様もそう思ってくださっていたら嬉しいのですが。」

大きな手で、強すぎず弱すぎず、丁寧にふくらはぎをほぐしてゆきながらも、視線はあたしに向けられた。

「うん…あたしも、会いたかったです。」

なぜだろう。その時は、すんなり言葉に出せたんだ。自分でもびっくりするくらいに自然と出た言葉に、言ってから恥ずかしくなって、視線を天井に移してしまった。だから、セルジュさんが珍しく頬を赤く染めた事を、あたしは全然知らなかったんだ。

――――――――――――――――――――

その日は朝から大賑わいだった。

昨日まで3人で座っていたダイニングテーブルに、一気に3人加わったんだもの。

食べ盛りの悠馬はパパと離れて暮らすという事を、意外な程にすん

なり受け入れたのか、朝からものすごい食欲を見せていた。
ママはこの日パートをお休みする事にしたらしい。シフト変更を既に済ませていたんだから手際が良い。それもこれも、悠馬の為だ。
今まで義兄(あに)ルールであまり我が家に出入りできなかった初孫との同居第1日目だ。ママに言わせると、「働いてなんかいられない」のだそうだ。
悠馬の転校先に決まった学校に通う子がいるご近所へ挨拶に行くのだと張り切っていた。

お姉ちゃんは少し疲れたように見えるけれども、それでも憑き物が落ちたように、すっきりした表情だった。
なんでも、お義兄さんはかなり前から浮気していたのだという。お姉ちゃんはそれを我慢していたんだけど、悠馬が本当に自分の息子なのか、ＤＮＡ鑑定に出されていた事で、離婚を決意したのだそうだ。
慰謝料や、会社の社長辞任騒動、株主への説明等で1ヶ月かかったそうで、セルジュさんはそれにずっと付き添っていたのだと言っていた。
そんな話を一通り聞くと、あたしは寂しかったとか何とか言って、抱きついて泣き出したそうで…泣き止んだと思ったら、眠ってしまってて、セルジュさんは一晩中、眠ってるあたしを抱きしめながら慰めていてくれたのだと……ていうか！！！それを聞かされた時はほんとに顔から火が出るかと思ったよ！寝ちゃってたら、慰められても聞こえないし！だ、抱きしめるとか…放っておいてくれて良かったのにーーー！そう言ったら、「放っておくなど、出来ません」と言われて、またまた顔に熱を持ったのだった。

「どうしたの、みはる…ニヤニヤしたり真顔になったり…熱でもある？ちょっと顔赤いわよ？」

「あっ！赤くないよ！ニヤニヤなんてしてないもん！」

「そう～？？怪しいな～。なんせ昨日は彼を離さなくって…」

「わぁぁぁぁぁ！！お、おねーちゃん！今日は何するの？」

意味ありげに声色を変えたお姉ちゃんに、あたしは慌てて話題を変えた。

「今日？家具を見に行ってくるわ。来週には悠馬の登校も始まるし、急いで整えなきゃね。
みはるには悪いけど、今日も1日セルジュさんを借りるわね。」

慰謝料がっぽりだから、ぜぇーんぶ買い揃えてやる！そう力強く宣言したお姉ちゃんは逞しい。

「でもさぁ、お姉ちゃん、セルジュさんの買い物には気をつけてね。セルジュさん、部屋に納まらないとか考えないでドでかい家具買おうとするからさー。止めてね。」

セルジュさんがウチに来たばかりの頃、キングサイズのベッドを買おうとした事を思い出した。一緒に買い物に行くお姉ちゃんに教えとかなきゃ、大変なことになるかも。
なのにお姉ちゃんは不思議そうに首を傾げた。

「セルジュさん？なんで？あたし、家具は自分で選ぶわよ？」

「お姉ちゃんのじゃなくって、セルジュさん本人のだよー。」

「え？セルジュさんのをなんで買うのよ。彼はまた東京に戻るんで

しょう？」

「え？……」

な、なんですとーーーーー！！！

「だってみはる。ウチじゃ部屋数無いのよ？1階の和室ってわけにも…それに…」

「お嬢様…私は向こうに仕事がありますから、みさきさんが落ち着いたらまた東京に行かなければなりません。昨夜申し上げたのですが…覚えてらっしゃらないのですね。」

おおおお、覚えてません！

心がまたどんどん沈んでいくのが分かった。今はこの空間から逃げたくて、出勤時間にはまだ早いのに、「お、遅れちゃいそうだから、行くね」と家を出た。

家から離れたら少しでも楽になるかと思って、いつも以上に元気に挨拶しながら出勤したあたしを、まゆさんはなんだかビックリしたように見ていた。

「みはるちゃん？あの、もうだいぶ元気になったのかしら？」

「へ？ハイ、勿論！」

それは嘘で、ただの強がりだったけどまゆさんは気付かなかったらしい。

そんなあたしに、この日2回目の爆弾が落とされた。

「良かったぁ！今までみはるちゃん、心ここにあらずって感じで言えなかったの。でももう、ギリギリだから、今日話せるのは良かったぁ！」

「え？ど、どしたんですか？まゆさん…そういえば、ちょっと顔色悪いですよ？なんかやつれた感じだし…あ！！！もしかして！！」

「当たり！！妊娠！しちゃいました～～！」

「きゃーー！まゆさん、おめでとう～～！もう！そんなおめでたい話なら、すぐにして欲しかったよ！お祝いしなきゃー！」

無理にはしゃぐあたしを尻目に、まゆさんは一気にテンションが下がったようだった。

「え、えと？まゆさん？」

「あのね…それで…お店、閉めようと思うの。夫から、子育てが落ち着いたら本格的に実家の仕事を手伝って欲しいって言われててね。だからその…雇って…いられないの。」

まゆさんのご主人は、地元の大きな画材屋さんの専務で跡取り息子だ。まゆさんに甘いご主人が、この雑貨店を始めるのを後押ししてくれたが、それには条件があった。
代替わりして自分が社長となる時には、家の仕事に専念する事…つまり、この雑貨店は期間限定のものだったのだ。
勿論、期間限定とは言っても具体的な期日があったわけではない。
でも、今回のまゆさんの妊娠でその話が出たらしいのだ。

「そ、そうなんですか～……じゃあ、皆も？」

あたしのほかにも、４人バイトの子がいる。皆地元の美術大学の学生か、卒業生だ。

「う～ん…それがね…実は、田口くんが油絵で大きな賞を取ってね。彼は制作活動もなんだけど、いずれ絵画教室をやりたいって考えてたみたいなのね。」

田口くんは、美術大学の卒業生で、このお店一番の古株だ。確か２６歳なんだけど、長めの髪を軽く結んだいかにも芸術家っぽい風貌の彼は、とても穏やかな人で、実は隠れファンが多い。

「じゃあ、ここは絵画教室に？」

「そうなのー。ウチもほら、画材屋じゃない？家賃をウチが少し出して、ウチの画材を教室の隅で売ってもらう予定なの。田口くんのアシスタントで阪木さんは残って……えっと、ごめん！！」

阪木（サカキ）さんは美術学校の学生さんだ。専攻は油絵で、田口くんを慕っているのは丸分かりだったんだよね…。

他の２人は専攻が違うから、お店を去るのだろう。

まったく。どうやらあたしが腑抜けだったこの１ヶ月で話はどんどん進んでいたらしい。

目の前で、手を合わせて謝るまゆさんは、言いたかったのに、あたしが聞ける状況じゃないのを知ってて言えなかったんだろう。

初めての妊娠で不安もあるだろうに、悪い事しちゃったな。

「ううん！大丈夫だよ！まゆさんはさ、赤ちゃんのことだけ考えて

？」

ね？と、笑顔で言ったものの……やばい。む、無職だ……。この先、どうしよう？

勿論、この日の仕事も心ここにあらず状態になってしまったのは、仕方の無いことだと思う。

セルジュさんはまたあたしから離れて行っちゃう。

しかもあたし、無職になっちゃうし。

セルジュさんが居る事ってそんなに重要？

だって、ちょっと前まではあたしの生活には関わりが無かったんだよ？

そう、だってこれからはお姉ちゃんと悠馬が居るし！

あぁぁ…でもなんだろう、この喪失感。

あれだ。無職になるからだ。セルジュさん、東京で仕事があるって言ってたな。

もしかして、モデル事務所の新しい社長ってセルジュさんなのかな？

確かに就職して欲しいとは言ったけど、そう話した本人は無職になってセルジュさんはいきなり社長だなんて！

そんな事を考えながら自転車に乗っていたらあっという間に家に着いてしまった。

玄関前には大きなトラックが横付けされている。

今日買った家具の配達かな？やけに早いけれど、セルジュさんのことだ。それ位は充分にあり得る。

ピタリと横付けされたトラックの脇をすり抜けるようにして敷地内に入ったあたしを、本日3度目の衝撃が襲った。

「あたしのベッド！！」

その声に、きらんきらんの金髪が振り返る。

「お嬢様。お帰りなさいませ。」

相変わらずの美しい微笑みを浮かべていますが、その手にしている物は私のパソコンですよね？

「それ…は、何？」

「新居は光ですから、今までよりネット環境も良くなりますよ。」

すみません。なんだか会話がかみ合っていないようですが気のせいですか？

呆然と立ち尽くすあたしの横を、ツナギを着たお兄さんたちが掛け声を掛けながらさっさとあたしの荷物を運び出す。

「え？え？えええええ？な、なんであたしの荷物運び出してるの？」

「お引越しだからですよ？」

「それはお姉ちゃんでしょう？」

「悠馬くんもですよ？」

「分かってるよ！」

「お嬢様のお部屋は、悠馬くんのお部屋になりましたので。」

「は？え？何？ま、ママ！これは一体…。」

玄関に駆け込んで、ママをとっ捕まえた。

「悠馬もね、もう小学生なんだから、ママと一緒の部屋じゃ恥ずかしいって言うのよ。」

「そうかもしれないけど！でもほら、仕事も…」

「あら？まゆさん、お店畳むから無職になるんでしょ？」

うぐ。そ、そうでした……なんで知ってるんだろう。

「だからって…」

「そしたらセルジュさんが、お任せくださいって言うから。だからママたちみはるの事はセルジュさんにまかせて、これからは孫を構い倒す事にしたの。」

「パパは！？」

「パパは今悠馬を連れて地元のサッカークラブの練習見学に行ってるわ。言っておくけど…セルジュさんに任せると言い出したのはパパですからね？あなたが一晩中セルジュさんから離れなくて…」

「あわわわわ！ま、ママ！」

昨夜の話を出されるのはどうにも恥ずかしい。おまけに引越し業者さんがいるのに、そんな話聞かれたら恥ずかしいじゃん！

慌ててママの口を手で塞ぎ、周りを確認すると、既にお兄さんたちは消えていた。

そんなあたし達にセルジュさんが後ろから声を掛けてくる。

「ではお嬢様、参りましょうか。」

「ど、どこへ？」

「勿論、私達の新居へ。」

この時のセルジュさんの笑顔は、この日一番のキラキラを振りまいていた。

執事さんのお引越し（後書き）

セルジュさんのお引越しかと思いきや、ヒロイン巻き込まれた模様。

執事さんの執事さんの…

あたしは今、首が痛くなるほど空を見上げている。

緩くカーブを描くその美しい建物は下からライトアップされており、その柔らかな光と建物の窓からもれるいくつかの灯りとが相俟(あいま)って幻想的なまでに美しかった。

どれだけ磨きこまれたんだろう。目の前のガラスは一点の曇りも無く大口開けたあほ面で空を見上げているあたしをしっかりと写していた。

窓からもれる灯りは、上へ行けば行くほどに小さく淡くなり、夜闇にぽつんぽつんと彩を与えていた。

呆けていたあたしは、小さな頃夏になると川辺に行って家族で見た蛍の明かりを思い出していた。

この灯りは飛び回らないけどねーー。って!!違うから!つか、ここどこ!?なんであたしここに居るんだ!?

思い出せー!よーく思い出せあたし!

えーと、セルジュさんが東京に戻るって聞いて、仕事ではまゆさんの妊娠とお店の撤退を聞かされて同時に無職になって。

で、落ち込んで帰ったら引越し屋さんがあたしの荷物をトラックに積み込んでて…。

そうだ。それでその後あわあわしてたら、懐かしのおベンツセルジュ号の助手席に押し込められたんだ。

乗ってすぐはパニックだった。

「なんであたしまで引っ越すの!?」

「ですから、お嬢様のお部屋は悠馬くんが使う事になったのですよ」
「だからって東京!?」
「私にも仕事がありますので」
「そーかもしれないけど!あたしにだって…」
「お店は絵画教室に変わるのでしょう?」

なぜそれをーーー!!!あたしですら今日知ったのに!あたし当事者なんだけど!

「でもいきなり即日引越しってー!」
「私と離れるのは寂しいと今朝おっしゃって…」
「わーーー!ソレ!それ恥ずかしいから止めて!で!でもホラ!えっと、お姉ちゃん戻ってきたんだから、急に東京行っても家がないよ!それにいくら仕事が無くなったって言っても、東京に行ったからって解決するかな!?どうかな?どうなんだろう?」

そうそう。いちいちなんだかもっともな答えを返されたんだけど、それでも「え?だからって何で?」の繰り返しで、なんで?なんで?って騒いでたんだった!
結局、素敵な乗り心地のセルジュ号で座席に深く座りなおしたらそのまま寝てしまったみたいなんだけどね……。
そこはこの1日がとにかく精神的に起伏の激しい日だったんだから、仕方がないと思う!

そして着いたのがここです。

お姉ちゃんの家があった場所じゃないのは確か。ていうか、ハジメマシテの景色です!
かなりの深夜だったんだけど知らない場所なのはわかる。高台にあるこの一角は道幅も広くヨーロピアンデザインの街灯はうちの田舎

と違って1つのもれもなく全てが煌々と灯されていた。
お洒落な建物が立ち並ぶその通りは、高級車が立ち並ぶ見るからに高級そうなレストランやカフェ、きっと大きな室内プールがついてるんじゃないかな?な、大きなジム、そして億ションが並んでいた。
すると、おベンツセルジュ号は通りの奥にある一際大きな門の前で止まった。
すると、すぐに門が内側にゆっくりと開いてゆく。
大きな門はその左右を蔦の絡まる高い塀に囲まれていて、実際門の中に入るまで敷地の中は一切見えなかった。
だから、中に入った瞬間自分の目を疑っちゃったよ!
何ここ!ほんとに東京なの?土地代が一坪ウン千万とかウン億とかする東京?
駐車場完備してないお店が殆どで、建物も隙間無くびっしり建ってマンションなんかも部屋が狭くて、なのにお家賃が田舎の倍は取られちゃうあの東京??
だってさ。目の前に広がるのは、きっと青々としてるんだろうなって芝生に噴水まであって、カーブが美しい高層タワーの脇には木々まで見える。
おベンツセルジュ号は、そんな敷地の中央に敷き詰められた道を進んで行く。独特の振動で、きっと石畳なんだろうなって思った。
それはどでんと鎮座する大きな噴水に続いている。どうやら噴水は門からのエントランスの目隠しとロータリーの役目があるみたい。
車が音も無く静かに止まると、いつの間にか現れたかっちりした制服姿の男性が現れた。あれ??看板とか無かったけど、ここってホテル?その人はドアマンのような制服を着ていた。
開けられたドアからふらふらと降りると、セルジュさんには「おかえりなさいませ」と声をかけ、その制服の男の人が代わりに車に乗り込んでさっさと出発してしまった。

そして、今この建物を見上げているのだ。

「お嬢様？」

「セルジュさん…この建物、てっぺんが見えませんけど…」

「もっと離れて見たらちゃんと見えますよ。それは明日にでも致しましょう。今日はもう遅いですから、入りましょう」

「ここ、ホテルですか？」

「いえ？新居ですよ」

「えええええ！？」

今日何度目かの衝撃があたしを襲い、眩暈がした。
力の入らない腕を、セルジュさんにさっさと取られ、建物に入るとお上品な中年の女性に迎えられた。

「おかえりなさいませ、お嬢様、セルジュ様」

かっちりとしたスーツに身を包んだその女性は、深夜だというのに服も髪もお化粧も乱れは無い。

「お嬢様、こちらは柏木みどりさんといいまして、このマンションのコンシェルジュをしております」

「こ、こんしぇるじゅのかしわぎさん…？」

「どうぞよろしくお願い致します。私(わたくし)の事は柏木、とお呼びください」

もう一度深々とお辞儀をすると、柏木さんは「ご案内致します」と言い、エレベーターに向かった。

なんだここ…エレベーターどこにあるの!?って位広いんですが!

横にはフロントのようなカウンターもあり、連れられて前を通るとやはり「おかえりなさいませ」と深々と頭を下げられた。

エレベーターも向かい合って6つの扉があった。

1つ既に扉が開いて乗れる状態なのに、柏木さんはそれを通り過ぎて行く。

すると、一番右奥の扉の前で止まった。扉は他の5基と一緒なのにここだけ付いているボタンが違っていて、ここだけがタッチパネルのようになっていた。

「指紋認証パネルでございます。このエレベーターは最上階のペントハウス専用となっております。お嬢様の指紋は既に登録済みでございます」

ええ!?指紋なんて生まれてこのかた採られた事ありませんが!いつの間に!

恐る恐るタッチパネルに指を触れさせると、細かな細工が美しい銀色の扉がしゅるん。と開いた。

うえええー!ほんとに登録されてるよ!いつの間に!!

案内されるままに乗り込んで振り返ると、柏木さんがお辞儀して見送ってくれていた。

「あれ？柏木さんは乗らないんですかね？」

「ええ。彼女も自分の仕事が他にありますから」

「そっか。これだけ大きなマンションだったらお仕事忙しそうですもんね。ところで！最上階って言いました！？さっき見上げても見えなかったんですけど！一体何階なんですか！？」

「３０階ですよ？標準よりも天井が高い設計ですからもっと高く見えるのかもしれませんね」

さ、３０階！！サラリとそんな事言ってくれちゃってるけど、充分高いよ！むしろあたしには展望台レベルなんだけど！

そうこうしてる間に、独特の浮遊感さえも感じる事なくいつの間にかその最上階に到着していた。早っ！

静かに扉が開くと、今度は中年のスーツ姿もダンディな男性がお辞儀をして迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、お嬢様、セルジュ様」

「お嬢様、こちらはペントハウス専用のコンシェルジュをしております村井和敏さんです」

「ぺんとはうすの専用？？」

「村井でございます」

「は、はぁ…」

「お荷物は全て運ばれております。どうぞ、お部屋へ」

「うん、ありがとう。ではお嬢様、こちらです」

「う、うん??」

大きな大きなシックなブラウンの扉にはプレートも何もない。鍵穴も無く、横にはまたもやタッチパネルがあるのみ。

「これはもしや…」

「ええ。どうぞ触れてみてください」

軽く触れると、ドアがかちり。と音を立てて開錠したのが分かった。

「入って、いいの?」

「勿論です。お嬢様のお部屋なのですから」

「お、お邪魔しまーす」

恐る恐る扉を開けると、今度はお上品な白髪の細身の男性がお辞儀をして迎えてくれた。

出た!また出た!!今度は何!

……しかも日本人じゃないしーーー!

顔を上げたその人は、彫りが深い端正な顔立ちで優しげなグリーンの瞳が印象的な初老の男性だった。

その顔立ちからジュエル王国の人である事がわかる。

「おかえりなさいませ。お嬢様、セルジュ様」

「お嬢様、ジェラールです。ここで私達の世話をしてくれます」

「お世話…」

「ええ…国で私付きの執事だったのですよ」

「セルジュさんの、執事さん？」

「左様でございます。私にお申し付けくだされば、私か、村井か、柏木が手配致しますので、なんなりとお申し付けくださいませ」

「え？村井さんに柏木さん、ですか？」

「まぁ…コンシェルジュは執事の資格がありますので、それぞれをペントハウス付き執事、マンション付き執事、と思って頂ければ…。ちなみに、柏木の上司が村井で、村井の上司がジェラールです」

「え？上司？村井さんと柏木さんはともかく、ジェラールさんもここのマンションの管理会社の社員さんなんですか？それになんで皆あたしをお嬢様なんて呼ぶんですか？」

「…先程お車で申し上げたのですが……確かに、管理は委託してますけれど、このマンションはお嬢様の所有ですので、実質お嬢様が柏木と村井とジェラールの主（あるじ）なのです」

「な、な、なんですとーーーーー！！！！！」

何なの、今日は！もう気を失ってもいいですか？起きたらどうか、田舎の小さな一軒家の狭い自室でシングルベッドで目覚めますように！

そう願ったんだけど、残念ながら全て現実だったようで、一晩経ってもあたしはこの街が一望できる高層マンションの最上階に居た。そして執事さん（セルジュさん）の執事さん（ジェラールさん）の執事さん（村井さん）のそのまた執事さん（柏木さん）まで出来てしまったのだ……。

執事さんはナルシスト（前書き）

すみません。軽い話が書きたくなって勢いだけで更新です。
後日言い回しとか手直しするかもしれません。

落ち着かない。

私の部屋だと言われた、所謂主寝室は、なんと３０畳もあった。

ええっと３０畳ってこんなに広いんだっけ？

数字上ではなんとなく雰囲気つかめるんだけど、実際ここで今日から寝泊りしろち言われたら、正直落ち着かない広さだ。

しかも、どでんと置かれているベッドは大きい！これがきっと以前セルジュさんがこだわっていたキングサイズというヤツではないだろうか。

だって、あの家具屋さんで見たクイーンサイズよりも大きい気がするもん。

いや、クイーンサイズかも……自信ないな。

なんで自信がないかっていうと、ベッドの全体像が見えないのだ。

それまたなんでかっていうと……。

ちょっとコレ天蓋ついてますよ！！

淡いピンクや淡いオレンジの花びらのような薄い布が天蓋から優雅に垂れ下がるホワイトレースを彩っている。

天蓋付きのベッドというと、ピンクや白のふりふりレースのプリンセスベッドのイメージがあったのだけれど、目の前にあるベッドは優しく深い色合いのブラウンで可愛いというよりは美しい、という言葉が相応しかった。

ベッドに対して美しいって思うとは思わなかったけど……。

驚いたけれど、好奇心に負けたあたしはいそいそとベッドの上へとよじ登った。

文字通りよじ登ったんだよ！

高いな！もし寝てて落ちちゃったらどうするの！痛いじゃないの！

あぁー本物のお嬢様やお姫様は寝相までいいのかな。落ちるなんてあり得ないか。

中に入ってみると、ふかふかのお布団に視界を優雅に遮るレースはあたしに程よい閉塞感を与えた。レースは今カーテンのように四隅で括られているけれど、それでもまだたっぷりとしたドレープが広い寝室から空間を切り取ってくれている。

うーん、いい感じの狭さだ。こっちの方が落ち着く……。やっぱりあたしは庶民なんだなぁー。

ここがベッドと考えると広すぎるんだけどね。

ベッドの横にはサイドテーブルがあるんだけど……あのさ、手を伸ばしても届かないんだけど、これってどうなの？アリなの？

よいしょよいしょ。とベッドの上を移動して（とてもマヌケな光景だと思うんだけど、これを世のおセレブ様もしているの？）サイドテーブルにたどり着いたあたしは、横に取り付けられたリモコンのようなものを見つけた。

ひとつは……テレビ？これはテレビですね？人気俳優さんがＣＭやってるテレビの商品名が印字されてる小さなボタンが沢山ついたテレビのリモコンだ。

んんー？でもどこにテレビがあるの？見当たらないんだけど……あたしはリモコンを手にとって、とりあえず電源ボタンを押してみた。

ウィン。

どこかから音がして部屋を見渡すと、しゅるん！と壁一面にあった扉のひとつがシャッターのように上に巻き上げられ、これまた大きなおテレビ様が現れた。

ええええ！まさか壁の中から出てくるとは！！いや、扉があるから収納なんだろうなとは思ってたけど、まさかテレビが出てくるとは…

…ベッドで寛ぎながら見れるって事なのね？

そしてあたしはまたいそいそとベッドの中央に戻り、ふっかふかの五つも並べられている枕のひとつに頭を預けテレビを……あの、天蓋のレースで見れないんですけど……。

あの、実際天蓋ベッドを愛用しているおセレブ様ってこんな場合はどうしてるんだろう？動く度にセレブライフへの疑問が湧くんだけど……。

そして今度はリモコンの横にあったボタンを押してみようと、あたしはまたよいしょっとベッドの上を四つん這いで移動した。

そのボタンはテレビのリモコンと違ってサイドテーブルに固定されている。ボタンの下には、穴が数個並んでいるし……なんだろう？

空気穴？何の？

あぁ！！インターフォン？この広さじゃ誰かが訪ねてきても気付かないし！

思わずパチンと手を打ち鳴らすと、ベッドの上部の壁…ちょうど、天蓋の中に収まる様左右に取り付けられたアンティーク風のランプがポッと灯りを灯した。

び、びっくりした！！

なにコレは音に反応するの？

気を取り直してボタンを押してみると、すぐにセルジュさんがやって来た。

「お呼びですか？」

「え。これってもしかしてセルジュさんを呼ぶボタンだったんですか？」

「ええ。私が居ない場合には、ジェラールが参ります」

「あたしてっきりインターフォンかと……」

「インターフォン…で、ございますか？」

「だってこのマンションのお部屋、絶対実家よりも広いですよ。誰かが来ても聞こえない自信があります！」

「お嬢様がそのような事をなさる必要はございません。それはジェラールが行いますし、私達が留守の時には村井がお客様のお相手を致します」

「でも、そしたら村井さんお休みは？柏木さんだって……」

「ちゃんと休暇はございますよ。その際には次席の者がおりますので大丈夫です。ですが責任者である村井と柏木が一緒に休暇に入る事はございませんよ。その者達も追々ご紹介しますね」

次席！！！って事はまた執事の執事の執事の……って事になるの？これ以上はもう混乱するから勘弁して欲しい……！

「このボタンは私かジェラールに用事をいいつける時にお使いください。ベッドにいたまま呼べるようにしたのです」

セルジュさんが「便利でしょう？」とにっこり笑ったけど……ケド…

「でも…寝ながらは……届かないんだ、よね」

ぽつりと零した言葉に、セルジュさんの笑顔は止まったけれど、彼からの返事は無かった。うーん……触れない方が良かったのかな？

「と、とりあえず！おなかがすいたんですが！」

いたたまれずに、空気を変えようと思ってそう言うとやっとセルジュさんが動き出した。

えーー。あれごときで動き止められちゃったら天蓋の所為でテレビ見れないとか言えないよ……。

「遅いですから」と簡単に食べられる夕食がダイニングルームに用意されてたんだけど、チーズの香りがふうわりと鼻腔をくすぐるリゾットと色鮮やかなサラダ、温かなオニオンスープに瑞々しいフルーツ、それに小さなムースケーキまであった。

簡単な夕食でこれ！じゃあ普通の夕食ってどんな事に……それをちょっと考えて楽しみ……げふんげふん。いや、慣れちゃだめ慣れちゃダメ。

「このお部屋はかなり広いみたいですけど、もしかして最上階全部を使ってるんですか？建物自体、かなり大きいですけど……」

「ええ…。ですが、厳密に言いますとこの建物は二つが中央で繋がっているのですよ。西館と東館に分かれておりまして。こちらは東館の最上階です。西館の最上階にはまた別の住人がおりますので、建物全てのスペースを使用しているわけではないのですよ」

「そうなんですねー。それでも広すぎだけど……外から見たら曲線が綺麗でした。大きな建物ってカッチリした四角いイメージがあったんですけど、ここは違うんですね」

「ええ。ちょうど良い物件がみつかりましたので、少し前から準備していたのですよ。この建物は上空から見ると東館と西館を合わせた形が“S字”になっているのです」

「S……セルジュさんのSですね！」

「偶然ですけれどもね。何か縁があるように思えまして購入したのです」

「こうにゅう……あ、分譲マンションだったんですね？」

「いえ……建物まるごとですが……」

思わずあたしの口からプチトマトが飛び出したのは仕方が無いと思う！

それをセルジュさんは目の前でなんなくキャッチした。そしてあたしの口元にそっと運んでくれる。

いや！でも今はプチトマトを気にしてる場合ではないんです！一応受け取りますが、一旦お皿に置かせてください！一度口にしましたけども、ごめんなさい！それどころじゃないんです！

「この建物まるごと買ったって言いました？東館も西館もですか！？」

「ええ。サラダのドレッシングお好みでは御座いませんでしたか？」

いえいえ大変おいしゅうございますけども、プチトマトは後で食べますから！

「じゃあ、このマンション全部セルジュさんのなんですか？」

「いいえ？お嬢様のですよ？」

「はぁーーーー！？」

あたしは大口開けて叫んでしまった。やっぱりプチトマトをお皿に置いておいて良かった。

それにしても、それにしてもS字の建物だからって買っちゃうって……セルジュさんてほんとに自分大好きなんだから！

ん？でも……

「あたしの、なのに、セルジュさんのSなんだ……」

ついつい考えてる事を声にしてしまうと、セルジュさんの手がピタリと止まった。

「申し訳ございません。Mは見つからなかったのです。でもそれではいけませんね。M字の建物が無いなら建てましょうお嬢様！そしてすぐに引越しましょう！」

今日来てまた引っ越すんかい！

「いえ！大丈夫です！ええ、ほんと、ここ大好き！大満足！M字とかS字とかあたしはこだわってませんから！」

「そうですか？本当に？」

「はい！セルジュさん、だからまた引越しとか、それはやめましょう！あ！このリゾットも美味しいです！セルジュさんて本当に料理がお上手ですね！そうそう。さっきのプチトマトも食べなきゃ…」

セルジュさんの思考をなんとかM字豪邸から逸らすために多少おどけてプチトマトを口に頬張ったあたしは、即行後悔することになる。

「それはなによりです。彼も喜ぶでしょう。後ほどシェフを紹介いたしますね」

シェフまで居るのか！プフッ！この日再度口から飛び出したプチトマトは、またしてもセルジュさんにキャッチされた。

香澄、都子へ。

元気ですか？最近色々ありすぎてなかなか連絡できなくてごめんね。
突然ですが、あたしは最近ふたりの住む東京に引っ越して来ました。

ええと、厳密には引越しに連れて来られたと言うか……とにかく到着した先は都内の高級マンションでした。

え？住所？

ええと……どこだろ？よく分かりません。えっと、聞いてまた連絡するね。
落ち着いたらふたりには是非遊びに来てもらいたいな。

え？泊まれる場所があるかって？

うん！場所はいくらでもあるから大丈夫！…だと思うよ……まだどの部屋がどうなっているのかよく分かってないけど……。

え？意味が分からない？そうだよね。でも多分あたしが一番混乱してるんだけどね。
うん、とりあえずまた連絡するから！近い内に会おうね！

ふわふわの大きな枕が沢山並べられた中央で重い身体を動かし、メールを終えたあたしは手にした携帯電話をサイドテーブルに置こうと手を伸ばした。

（うー……遠い。ベッドから手が届かないサイドテーブルなんて。ほんと、意味が無いよ……）

あたしは諦めて手にした携帯電話を枕と枕の間に突っ込んだ。

そう、あたしはあまりの環境の変化にとうとう熱を出してぶっ倒れてしまったのである。

「ふぅ」

ため息をついて、少し持ち上げていた頭をぽすん。と枕に戻すと、天蓋から降り注ぐたっぷりとしたホワイトレースの向こうから低く柔らかな声がした。

「お嬢様。ご気分はいかかですか？」

誰も居ないと思っていたのに、ベッドサイドのカウチソファーにセルジュさんが居たらしい。寝込んでからというもの、天蓋のレースはまるで病室のカーテンのようにベッド全体を覆い、しかも部屋のカーテンも引かれているので室内は昼間でもほの暗く、全く気がつかなかった。

「い…」

いたの？と言おうとしたけど、うまく音にならない。

声がした方に顔を向けると、目の前でレースがかき分けられ、黒のシンプルなVネックのニットを着たセルジュさんが現れた。その手には冷たい水が入っているのだろう。表面に水滴のついたカットグ

ラスを持っていた。

そのグラスを見ると途端に喉の渇きを覚え、重だるい身体を起こそうとした。

「無理なさらないでくださいね。やっと熱が少し下がったのですから……」

セルジュさんはグラスを傾けないように器用にベッドに上がって来る。

え？え？なんで上がって来るの？グラス寄越してくれたらいいじゃない！抗議したいけど、喉の奥がひっつくように痛みうまく話せない。

「あぁ……いけません。さぁ、大人しくお水を…ほら、飲ませて差し上げますから」

空いた左手で枕をふたつ掴み少し浮かせたあたしの背に差し入れ上体を少し起こす手伝いをしてくれた。その時枕の下から携帯をひっぱり出すとそれもサイドボードに置き、セルジュさんはすばやくあたしの真横にその身を滑らせた。

片肘をついて上から覗き込むその青い瞳は心配そうに揺れている。

なんですか！この添い寝状態は！？

何で一緒にベッドに入るの？話せないなら目で訴えてやる！

抗議の気持ちをこめてセルジュさんを見ると、セルジュさんはそっと肩をすくめた。

そのポーズすら様になるって、神様は本当に不公平だ。しかも、身

につけているニットは結構Vネックが深くて、肩をすくめた仕草で意外なほどに逞しい胸筋がチラリと……なんなんですか！水を持ってくるのにそんなに色気は必要ないと思いますが！！

「靴はきちんと脱ぎましたよ？」

って、抗議内容も伝わってないし！！

そう、そうなんです。欧米式に室内も靴なんです。慣れないあたしはルームシューズで過ごしてる。

これも抗議したんだけど、セルジュさんにこう言われたわけだ。自分は良いけれど、ジェラールが困るでしょう、と。

ピシッとタキシードを着ているダンディなジェラールさんは、執事歴の長いベテランさんだそうだ。その為拘りもプライドもあり、仕事着はタキシードに磨き上げた革靴。これは譲れないのだそうだ。

「お嬢様のお願いでしたら。ジェラールはすぐに室内土禁にするでしょうけれど……彼の一流執事としてのプライドは少なからず、傷つけてしまうでしょう……。いえ、ジェラールもベッドサイドにスリッパを置いておりますよ？眠る時はタキシードを脱ぎますしね。孫からプレゼントされたという、丸い耳がついたアイボリーカラーのモコモコしたスリッパを持っておりますよ。では明日から足元をそのモコモコくまちゃんスリッパに替えて…」

「ごめんなさい。モウイイデス。ジェラールさんには是非ピッカピカの革靴で全身ピシーッ！としていて欲しいです！」

あたしの頭の中では、タキシードをピシッと着こなしたジェラールさんがモコモコくまちゃんスリッパを履いてパタパタと歩く姿を想像して、なんだかもの悲しくなってしまった。想像上でもその背中には哀愁が漂っていたんだよ……。

だからその抗議はジェラールさんの元に届く前に取り下げたんだ。

そうしたら、数時間後にはあたしの元に淡いピンク色のバレエシュ

ーズのような形の可愛らしいルームシューズが届いたのです！！

……て、いやいや。そうじゃなくて！

あたしの意識がモコモコくまちゃんスリッパのジェラールさんに向いている内に、熱をもった背に少しひんやりする逞しい腕が回され、そのまますると流れるように脇に差し入れられた手が軽々とあたしの上半身を更に起こした。

それでもセルジュさんの右手にあるグラスの水はわずかに波立っただけだった。

グラスの中で水の表面がゆらりと揺れる様を見つめていたら、意識は身体に回された力強い腕と頭の上から注がれる柔らかな声に囚われた。

右半身が熱い。

微熱があるあたしの身体よりも、右半身にぴたりと寄り添うセルジュさんの熱を感じて、右半身が熱い。

「喉が痛むのでしょう？飲ませて差し上げます。少し上を向いてください」

言われるがまま少し上を向くと、ほの暗い室内でも宝石のように青く輝く瞳に出会った。

目が、離せない。

そのまま薄く開いた口とひりつく喉を、冷たい水がするりと潤していく。

でも、身体の中に入り込んだのは清らかな水だけだっただのかな。
なぜ、こんなにもドキドキするんだろう。
冷たい水を飲んだばかりなのに、顔が火照っていく。
目が離せない。いやだ。心臓が壊れそう。

「お嬢様？またご気分が？」

その言葉に、ずっとぼうっとセルジュさんの瞳を見上げていた事に気付いたあたしは慌てて視線を外した。ひー！何だったんだろ今の！何？セルジュ・マジックか！？

「お嬢様？」

「あああああありがとう！あの！なんで一緒にベッドに居るのかな？」

「ベッドサイドからですと、お水を飲ませる事ができませんし」

キングサイズいいとこ無しじゃんー！

「もう飲んだ！ホラ！もう話せるし！あたし、汗かいて多分臭うから！ちょっと離れた方がいいと思うよ！？」

自分で言っておきながら何なんですけどもね。起き上がるために添えられた脇下の手が今になってものすごく気になります！
いやぁー！脇汗は女の子の敵なんですのよ！！手を！手をどかしてくださいーっ！
慌てて添えられていた手を引き剥がすと、慌てているあたしにセル

ジュさんはとんでもない爆弾を落とした。

「大丈夫ですよ。数時間置きに蒸しタオルでお身体を拭いてパジャマも替えておりますから」

……エ？

ギギギギ……とぎこちなく自分の身体に目をやると……

のぉーーーーー！

昨晩見た水玉パジャマじゃないーーー！あたしの身体は初めて見る小花柄が可愛らしいオフホワイトのパジャマに包まれていた。

下着は…確認する勇気が無い……。

あの、もう一度ぶっ倒れていいですか？

香澄、都子へ。連絡するのはもう少し待っててください。このショックからはしばらく立ち直れそうにありません……。

執事さん式看病（後書き）

少し前にＴｗｉｔｔｅｒで出たネタです。
それを更にもりもりっと盛ってみました（＊＾―＾＊）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8068j/

セレブな執事と庶民な主

2011年12月13日04時49分発行